

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

これはゾンビですか？いいえ、彼は黒の剣士です。

【作者名】

西じゃない東

【あらすじ】

ある日、交通事故で死んでしまった坂本彰人は、これはゾンビですか？の世界に桐ヶ谷和人の姿と名前をもって、転生させられる。作者が、受験生のために更新は不定期になります。

これは、アットノベルズ、暁の方でも連載させてもらってます。

第零話「これは転生ですか？」

「うっ……うっは？」

目の前には白い空間が、広がっていた。

「確か、俺は道を歩いていて……だめだ、思い出せない」

俺は、何かあるかと周りを見たそこには……

「おっ、目が覚めたか」

いつの間に現れたのか、俺の後ろに、長いおひげをしたおじいさんが。

「誰だ？ あんた」

「ああ、ワシは神様じゃ」

「は？ 神様？ なんでそんなのがいるんだ？」

「うむ実はのう。わしの手違いで本来なら、まだ生きるはずだったおぬしを交通事故にあわせてしまっただけ。それで、おぬしを転生させてやるのう……な？」

「なんかべたな展開だな。元の世界にるのはだめなのか？」

「無論駄目じゃ」

「無論なんだ・・・」

俺には、分からないのだが、転生とかそういうのでは、「う」の
が常識なのだろうか？

「希望は、ソードアート・オンラインなんだけど。」

「いや、おぬしが転生するのは、これゾンじゃ？」

「これゾンなんだそれ？」

「まさかおぬし　これはゾンビですか？　を知らんのか？」

「ああ、まったく知らん。ホラーかなんかなのか？」

ゾンビとついているから、たぶんそうだろう、と思ったのだが、目
の前で神がため息をついていた。どつちやら違うらしい。

「まあ、いい・・・なら姿はSAOの主人公の桐ヶ谷和人にしてやる
う」

「いや・・・俺は別に本人になりたいわけじゃないんだが」

「別にいいじゃろう？能力はこちらで決めておく」

「ああ・・・ん？能力バトルものなのか？・・・まあ、別にいいよ。戦
いたいわけじゃないからな」

「ほう、珍しいな、普通「う」いう時は自分で決めたいといってくるも
のなのじゃがな」

「へえ、そういうものか、まあ生きていけるぐらいなら、別にいいよ」

「なら、その扉をくぐれそしたら転生できる。」

「ああ、じゃあな神様」

そうして俺は扉をくぐった。

「無欲な少年じゃったな。・・・少しサービスしてやるっか」

どうも、坂本彰人改め、桐ヶ谷和人だ。

転生したときは少し・・・いやかなりびっくりした。なにせ、いきなり赤ん坊からスタートだったからな、あの神様には一言忠告することの大切さを延々と説く必要があるかもしれない。

それで、今、高校2年生だ。そして神様からもらった能力は、というとなんのかまだ分からない。というか

発動すらしていないのだ。

まさか、神様のミスだろうかと思ったりしたが、別にどうでもいい、戦いたいわけじゃないからな。

そして、両親は普通の人だった。もしかしたら、SAOの、とか思っていただけに少しほっとした。まあ、今は両親どちらも海外へ仕事

で、いつ帰ってくるか分からないけどな。

だから、いま親友の家で居候している。そいつは・・・

「おい、カズ、いっしょにコンビニいこうぜー」

こいつだ、相川歩。けっこついいやつで、小学校の頃からの親友だ。

「ああ、今行く」

そして俺は、メガネをかけ外へ向かった。

「でな、春の新作メニューにおいしそうなやつがあったな」

アユムは、楽しそうにしゃべっている。

「おまえって、本当にコンビニ好きなんだな」

「ああ、もちろんだ。いや、コンビニ好きじゃないコンビニマニアだ

」

と格好をつけて言われた。

・・・あんまりそういう風ないうのやめるよ少し気持ち悪いから。

「へえー、おっコンビニだ」

「まで、」

「は？いきなりどうしたんだお前は？」

「見る、あんなところだ」

言われて、アユムMの指の方向を向くと、

「うわ、なんかのコスプレか？」

「ちがうだろ！あんなにかわいい子がいるって言ってるんだ」

確かにその子はかわいかった。銀髪で碧眼でまだ150cmぐらいのその子を見ていると守ってあげたいと、思ってしまったぐらいだ。

「ああ、たしかにかわいいな、で？」

「あの子に話しかけたい」

「へー、なら行ってこい」

「待ってって！何かアドバイスとかないのかよ」

「アドバイス？あーそうだな・・・」

少し考えてみる、ああ、そういえば。

「そういえば、テレビで、突飛な言動は、女を惹きつけるって言うたな」

「そうか・・・なら行ってくる」

「おうがんばれよ」

そして、アユムは、銀髪の子に、

「もののけ姫を信じますか？」

と言った。・・・っておかしいだろ！突飛な言動にしても、もう少し選べよーほら、あの子も顔をそむけちゃったよ。まあ、そうなるだろ。

すると、いきなり走り始め、

「ウルトラC」「ぐきっ」「ぎゃああああっっっっ足首があああっっっ」

あほだ。そう思いつつもアユムを助けに行く。

「おい、だいじょうぶかー」

「うっ・・・がっ・・・」

「大丈夫じゃないっばいな・・・君もすまなかつたな」

彼女は少し震えていた、と言ってもそれは怖くて震えているわけではなく。

「いい、おもしろかった」

面白くて笑っていたのだ。

「それにしても、この子がかわいいな。」

そう素直に、思えるほどその子はかわいかった。そう思っていた罰なのだろうか、次の瞬間大きな衝撃に見舞われることになる。

「あなたの名前もしかするとキリト？」

「……はっ？」

「これはゾンビですか？はい、俺の親友がゾンビです。」

なぜだ？なぜ、この子がキリトという名を知っているんだ？この世界の小説でS A Oがないという事は、確認済みだ。なら、なぜこの子は俺の名前を？

「いや、ちがうよ。俺はキリトなんて名前じゃない」

「そう」

と、女の子は、短く答えた。・・・しかし、気になるな、そのキリトが、原作のキャラだとしてもだ、もしかして、霧ヶ峰藤吾朗という人がいて、その人が略称を名乗っただけかもしれないしな。念のため後で聞いておくか。そういえば、アユムはどうしたんだ？

「あーあ、痛かったな」

いつのまにか、立っていた。結構いやな音聞こえてたけどな。

「大丈夫か？」

「いや、お前の助言のせいだからな。」

「いや、まずその助言を選んだのは、お前で、それに普通あの助言を聞いていたとしてもあれは普通言わないからな」

「ぐっ」

この後、俺達は、たわいのない話を、女の子と一緒にしたりしてい

た。しかし結局、彼女は一言も声は一言も声は出さなかったが「右手」はとてもお喋りだった。

どれだけの時間話をしただろう。

可愛い女の子と、話をして、そして先にアユムが帰り、そのあと女の子に気になっていたことを、

「そういえば、キリトってどんなやつだったんだ。」

キリトのことを聞いた。何食わぬぶつに、言ってみたがどうだろうか？

「あなたに顔がとても似ていて、とても強かった」

「強かったってというのは、けんかとかか？」

「・・・」

何も書かない・・・ということとはけんかじゃないってことか。

そう思っていると、女の子は立ち上がり、

「来て」

「はっ、アユムくっ？」

「来て」

と、ちっぴきと同じ紙を見せてきた。

「なら質問を変える。なぜだ」

「あなたといっしょにいたひとが、危ない」

「なんだって？」

くつある家の玄関く

「窓に血が？これは急いだほづがいいかもな」

あれから俺たちはとある家に着き、そして今、中に入ろうとしている。

「おじゃましてーす」

小さめの声でそう言い中に入ると、鍵がかかってないと分かったときから、だいたい分かっていたが、

(人の気配がないな。)

そう、その部屋には人の気配が・・・人が生きていたという痕跡がまったくなかったのだ。

(どこにいるんだアユム！)

そして、角を曲がったときだった。

「アユムー！」

そこには、アユムがいた。しかし胸の中央には刀で刺されたような傷があった。そしてその後ろには、人影があり、背丈は、銀髪の女の子ぐらいであり、髪の毛は金髪で、顔は見えない。そしてその人影は、闇にとけるように消えた。

「おい、大丈夫か！おいアユム！」

すると女の子が、

「助ける方法はある」

「ほんとか？その方法って何だ？」

「彼をゾンビにする」

一瞬俺には、女の子が言ったことが分からなかった。

ゾンビ 意味 死体が生き返ったもの。全身は腐敗している。

「な、あ、あのゾンビにか？あの全身が腐ったみたいなやつ？」

「まだ、死んでないから腐ったりはしないけど、大体あなたが思っているようなもの」

「ああ、それでもいい。なら早く」

「なら、どこか広くて人気がないところに」

「ああ、分かった！」

この近くで、広くて、人気のない場所は・・・そうだ！

「心当たりがある。ついてきてくれるか？」

そして、アユムを背負い、家を出た。

～墓場～

「はあ、はあ、つ、着いたぞここだ。」

「分かった」

そう言って、女の子は、アユムの体に手をかざした。すると、周りに青い風がふき、それがアユムの体を集まっていくな。

その現象はすぐに収まり、元の静けさが戻るとアユムの手がぴくりと動き、

「うっ……うっは？」

「アユム！目が覚めたか。」

「ああ、でも、俺は確か……ってなんじゃこりゃああああ!!!」

「ああ、それはな、この子が生き返らせてくれたんだ」

「はあ？ならなにか？こいつは、ネクロマンサーだったのか？」

すると、女の子はこくりと小さくうなずいた。

「まじかよ」

「ああ、残念ながらこれは夢でもなんでもない。現実だ」

すると、また女の子が、

「たぶん、あれは姿を見たあなたと、殺されてないと分かったらそ

このあなたもまた、狙われるだろう」

「ならどうするんだ？」

「心配ない私が一緒にいる」

こうして、俺たちの日常は、超常に変わった。もしかしたら、これは決められたことだったのかもしれない。

とにかく、こうして俺達は、銀髪の少女、ユークリウッド・ヘルサイズと出会ったのだった。

「これはゾンビですか？　いいえ、魔装少女です。」

あれから、一カ月後梅雨も過ぎた快晴の午後、窓よりの席に座っている俺は、夏のうだるような暑さを耐えつつ、数学の授業を真面目に受けていた。すると、後ろから

「悪い、カーテン閉めてくれないか？」

アユムの声が、聞こえてきた。親友とも言えるアユムの頼みを無下にはしたくなかったのだが、

「無理だ、まず俺じゃあカーテンに手が届かないよ。織戸に頼めばいいんじゃないのか？」

「その織戸が寝ているからお前に頼んでるんだ」

ちらりと後ろを見てみると、たしかに織戸は爆睡中であった。

「悪いけど、自分でやってくれ。もうすぐあてられそうなんだ」

「ああ、そうか」

明らかにだるそうな、それでいて残念そうな声が聞こえてきた。

「この授業が終わったらカーテン閉めてやるよ」

「ああ、頼む」

見た目は普通の男子高校生だが、ゾンビでそして、魔装少女である。集中力のときれてしまった頭で、その時の事を思い出す。

大体十二時二十分だっただろう、太陽が沈むまでアユムといっしょにのんびり過ごし、夜を待って校門を出た

何でゾンビでもないお前が、夜まで待つのかと言われれば家に居ても暇だから、話す相手はいるが、会話が続かないからという事があげられる。

学校から相川家までは、約五分で帰る事ができるが、その日は俺もアユムも寄り道をして帰る気分だった。

アユムの家の近くに、墓場があるのだが、アユムはその場所が大好

きなのだ。まあ、俺も六月下旬の暑さに抵抗するような涼しい風は気持ちいいので、まあまあ悪くない。風景がおどろおどろしいのが玉に瑕だが……

しゃりしゃりと音をたて俺とアユムは中ほどまで進み、アユムは墓石の上に、俺はそんな事をする気にはなら

ないので立つたまま月を見ながらコンビニで買った雑采パンを食べながらひと時の至福の時をおくっていると

アユムに首を持たれ引きずられた。

「何するん

だ。と言おうとしたが、言葉を作るよりも先に、ドーン！とやや大げさじゃないのかと思うほどの音が鳴り、

さっきまで俺達がいた所には、大きな大きな穴があいていた。

そして、俺たちはよせばいいのにクレーターに近づいていった

「いたたたたたた」

そこには、目測百四十五cmぐらいの女の子がいて姿は、アキバでもこんなコスプレするやついないだろうと思うぐらいの服を着ていた。しかし、俺はその子よりその下にいた学ランを着たツキノワグマのほうぎきになった。でかい、とにかくでかい普通のツキノワグマより三倍……いや、それ以上の大きさだろう。

そして俺と、アユムの間には、なぜかピンク色のチェーンソウがあった。そしてアユムは、そのチェーンソウを持ち、「どっちら、見た

目にそぐわず軽いようだ。「おい」と少女に呼びかけた。が、栗のような色をしたその髪を振り乱し、猫のように大きな瞳でにらみつけてきた。なぜか、俺もいっしょに。

さすがに、女の子が怪我をしていないかどうか、心配になったので、

「大丈夫か？」

と声をかけると、頭のとっぺんの俗に言うアホ毛が、ピコンと動き、

「あー！ー！ー！」

とアユムのほつを向き言った。俺の事は無視か。

「あたしの魔装錬器！返せっ！早く！急げ！すぐさま刹那の内に早々に早々と即行で瞬く間に束の間に瞬時に一瞬でたちまち今すぐさっさとすぐさま返せっ！」

よつするに、すぐ返せという事を言いたいのである。ずしずしと地面を踏みながら、どンドンとアユムのほつに近づいていった。すると、どンドン服がすけて……す、透けっ？

「だから早く……おいそのメガネ何してるんだ」

俺は、裸が完全に見える前に手で、目を隠していた。メガネと言われても何も感じないくらいあせていたんだと思う。……あせていたんだと思いたい。

「あ……あのさ、ほかに着替えとかないのか？」

「ほえっ？」

俺の言葉を反復しているのだろう。あせったような声で、

「こっち見んなっ！この変態っ！エロスペシャルが！」

「いや、だから見ないように目を隠しているんだ。それよりそこで……指を立ててにやにやしてるやつになにか 言ったらどうなんだ？」

「じんのー」

即決即断だった。女の子はアユムの顔を蹴り飛ばし、墓石の後ろに隠れた。

これからどうするか、もう走って家まで帰るかと思っていると、後ろから、ぞくりといやな気配がしたので、

受身を考えずに飛ぶと、砂埃が舞い、アユムがぶっとんでいった。そしてそれを追う黒い影たぶんあれは、あの巨大ツキノワグマだろう。あいつは、ゾンビだから死なないのでアユムはほうっておいて、とりあえず、

俺は、近くの墓石に隠れると、

「こっちくんないこの変態ー」

「わびとじやな……くはっ」

女の子に、思いつきり腹をけられた。いや、場所を考えなかった俺も悪いけど、口で言うとかもっとこっち……と言いつつ、言い訳じみた事を考えつつ、俺は気になっていたことを聞いた。

「あいつは何なんだ？」

「あいつはB級メガ口の凶悪女子高校生クマツチだ！あんたあいつの友達なんだろう！あいつもすぐに殺されちゃうぞー！」

またわけの分からない言葉が出てきたぞ。と思いながら返答を返す。

「まあ、あいつなら、大丈夫だろ」

「ばか！ほんとばか！あんたら相手の力量も測れないのか？これだから、この世界の人間は！」

「全く」と何回もあきれた声で続いていた。お前はあいつをもっと信じろって。

すると、ここにまでクマのぬいぐるみに似た姿に見合わない猛々しい咆哮が聞こえてきた。

おお、「これはやばいかもな。」「俺と女の子が。」

すると、遠くから、

「学ランでいいか？」

「知るかつ！ は？ 何言ってるの？」

「お前の着替え」

それだけ言つとアユムは一気に距離をつめ、クマが、おそらく投げ

ようつとでもしていたのだろう。伸ばした手をつかみ引き寄せ、クマの頭を両手で持ち、首を回した。ゴキヤツという音がしてクマの首が落ちた。

なぜ、これだけの力が出せるのか、それはあいつがゾンビだからである。わかりやすくいうと、痛みも感じないしすぐ怪我も治るので普段人間がセーブしている力全てを出せるのだ。あまり上げすぎるとアユムの手が千切れたりするが。

そしてアユムは、学ランを彼女にわたし、「こっち見んな」といわれ蹴られたのは余談だろう。「女の子が、着替えるまで待ち、着替えると質問タイムとなった。

「あのくまはいつたいたいなんだ？」

「さっきも言っただろっ！凶悪悪魔男爵クマッチだっ！」

微妙に変わっていた。

「いや、そうじゃなくてだな、もっと総意としての正体を知りたいんだよ俺たちは。」

「あれは、あたしの世界を襲つやつらで、あたしの任務は、そいつらを倒す事なのっ！」

なるほど、つまりほつとくと、やばい奴らってことか。

「それよりそのあんた」

「なんだ？」

「その魔装錬器って」

「ああわかった」

そうしてとろつとしたのだが、

「っ…痛い」

触ろうとした瞬間バチバチつと音がして、俺の手に電気のスパークみたいなものが走った。そういえば、アユムが戦っているときに女の子もさわるつとしてはね返されてたな。

「すまんアユム。とってあげてくれ」

「あめ」

アユムが触っても何もおきなかった。

「おじちゃんとおんたらの家につれてけ。電話しなきゃ」

「んっ？電話ならいいにあるけど」

と言つと女の子はズザツと音がするぐらいの勢いであとを引かずおんた、

「何々その魔装具……………」

俺の愛用の黒の携帯を突き出すように前に出すと、おんたけるような動きを見せる。もっとやってあげようか。

と言つ考えをかるつしておんたえ、

「ただの電話だよ」

「ほんとか？もし騙したら、そのクマッチみたいになるからな。」
粒子化ってことが。できればなりたくないな。

軽くそれをあしらい、携帯を渡すと女の子はどこかにかけてだした。

「あ、大先生ですか？あたしです。リフレイン年ライジング組のハルナです！」

つながったようだ、どうやら、この女の子はハルナと言っらしい。
そしてこの世界と言っていたので相手は別世界だろう。電波って世界越えるんだな！そして、リフレイン年ライジング組って、どんなセンスだよお前の世界。

「えっ！まさかそんな！この世界の人間が……はい分かりました。
では」

そして電話をいささか乱暴に返してもらい、そのあとの女の子の第一声が、

「お前、私の魔力奪っただろ！」

と、アユムのほうに向けて言った。

「はっ」

「とぼけんな！この天才のハルナちゃんの魔力を奪うなんて、ありえないほどの魔力がないと無理だって、大先生が言ってた」

「残念ながら、俺はただのゾンビだ」

「不死者！ならあんたも」

まさかのところで俺に回ってきた。

「いや、俺はただの一般人、人間だ」

「フーン」

普通の人間と分かったら、興味0か。そして、再度アユムのほうを指差すと、

「あんた責任取ってもらうからな！」

「責任とは？」

わけが分からないと言った表情でアユムは聞いた。俺もだよ。

「あたしの任務は、この腐った世界でアーティファクトを探し出すこと。それと、魔装少女として、この世界に現れるメガロを探し出す事。それと魔装少女としてこの世界に現れるメガロを倒すこと。」

「ああ、『魔法少女』ねー。そうじゃないかと思っていたんだ」

「はあっ？あたしは『魔装少女』だ！ そんな陳腐なもんと一緒にすんなー！」

このままだと、一番重要なことが、聞けないような気がするので、

「メガロってさっきも言ってたけど、なんで、あんなものと戦ってい

るんだ？」

ゾンビであるアユムでも、骨が折れる相手なんだ、この小さい女の子では、手に余る……いや命の危険さえあるだろう。

「メガロってのはね、あたしの世界を壊そうとする害虫だ。一匹残らず駆逐しないと、あたしら魔装少女に未来はない。つまり、あたしは戦士なわけ。すごいっしょ！」

「なるほどな、天敵ってことか。ならなんで、そのメガロがこの世界に来るんだ？お前の世界を壊したいんなら、お前の世界で戦えばいいんじゃないのか？」

「じゃあ聞くけど、あなたは自分の家で戦争がしたいのか？」

だが、他人の庭でするのもおかしいだろ。結果的には、助けている事になっているんだろうけどなんだか腑に落ちない。そして、俺に対する説明は終わったとも言つかのようにアユムに向かい、

「とにかく、あたしは戦えなくなったから、あんたがやれ！」

「はっ？」

「あなたは今、現時点をもって魔装少女だっ！光栄だろっ！」

びしっとアユムに指を突きつけて言った。

「待て待て。その、魔法少女だっけ？俺は少女どころか男だぞ？やめたほうがいいって」

「俺も反対だ。そんな尻拭いみたいな真似をなんでアユムがやらな

ければならないんだ」

「知るかつー！やれって言うてるだろっ！」

こいつは、人の話を聞いているのだろうか？少しばかり意思セービング能力を使い、

「だけど、そんな簡単に……」

「その間……超ウルトラスーパー究極不本意だけど、あんたん家に居させてもらっからな」

「これ以上の悔しそうな顔はないだろうと言っぐらいの顔で、視線をそらしながら呟いた。

「そのあんた名前は？」

「歩だ。相川、歩……ていうか、やっぱり、もう少しかんがえて……」

「……アユム。そう、アユムだな」

聞く耳がほんとないな、こいつは……

俺がそう思っていると、アユムが、

「わかった。その……魔装少女とやらはやってやる」

「おい、アユムほんとにいいのか？今でさえ十分に……」

今でさえ、十分に危険なのに。そう言いたい俺の事を察したのか、

「ああ、元をたどれば俺のせいみたいだからな。しゃーなしだ」

「まあ、お前がいいならそれで俺はかまわないが」

そのアユムの最大級の譲歩に、女の子はアホ毛を弾ませ、したり顔で頷いた。

「そうと決まれば、早速魔装少女になる練習だ！」

拳を天に上げ、こ踊りしそうなステップで歩み出す小さな女の子の姿に俺は何か胸騒ぎのようなものを覚えた。

「ただし、ひとつ条件がある」

アユムが、そう女の子に言った。まあ、あたりまえか、こんなことをノーリスクで受けるわけが……

「俺の事をお兄ちゃんと呼んでくれ」

刹那の瞬間に蹴られていた。そりゃそうだろ。いや、しかしまさかここまで変態だったとは、

「……………」

「おい、和人？お前、俺を見る目が『失望した』とでもいいいたげな目になってるぞ!？」

いや、それはそうだろう。現に失望してるからな。

まあ、こんな訳で、相川 歩は、魔装少女になり、俺にロリコンじゃ

ないのかと疑われるはめになるわけだ。

今回は主人公サイドです。

アユムside

目が覚めると、すでに数学の時間は終わっており、次の授業が始まっていた。というより、その授業も終わりのようだ。

ふと左を見るとカーテンが風に揺れていて、暑いからなのか窓は開いている。さすが、和人。言った事はちゃんとしてくれるな。そんなことをぼーっと考えていると、チャイムが鳴り始める。

次は………おう、昼時ではないか。弁当、弁当と。

さっと取り出したるは手作り弁当だ。この弁当をつくったのは、何を隠そうあのハルナちゃん。そう、天才美少女悪魔男爵のあれだ。

「あたし、卵焼きには自信があるんだ！」

とか言いながら、意気揚々と料理をしてくれた。にんまりと、つい最高のゾンビスマイルを浮かべてしまう俺に、

「おい、アユム一緒に食べようか」

「ああ、いいぞ」

俺の前に座っていた和人がしゃべりかけてきた。男にしては、少し線が細くどこか中性的なイメージを感じさ

せる。目が悪いらしく、眼鏡をかけているがそれも似合っている、黒色がだいすきな、俺の親友である。ちなみにどれぐらい黒が好きな

のかというとハルナに『黒づくめさん』と呼ばれるほどである。

「和人お前ハルナに弁当作ってもらわなかったのか？」

さては、俺のためだけに作ってくれたのかと思い、いやおう無しにテンションが上がる。

「いや、俺が断ったんだ。さすがに家に来たばかりの人に弁当を作ってもらうわけにはいかないからな。」

一気にテンションが下がった。人間できてるな〜と思いつつ、たを開ける。すぐに、困惑に満ちる事となった。

オチが待っている。そんな予感はいたさ。

「勘弁してくれ」

頭を抱えて呟く。これならご飯がいい。白ご飯にふりかけのみのほうがましだ。

俺の弁当箱は、黄色一色だったんだ。

『あたし、卵焼きには自信があるんだ！』

それは良く分かった。だけど自信ありすぎだろう。卵焼きのみかよ。

「な、なかなか斬新な弁当だな」

そついつ和人は、同情の目を向けてきてくれる。

「斬新どころじゃねーよ」

そう言っただけは、うつむいた。

「相川。お前が普通の弁当ってめずらし……」

そこに、一人の男が現れた。名前は織戸。茶髪でツンツン頭にメガネをかけた、どこにでもいるただのうざいクラスメイトだ。同じく、メガネをかけている和人とはえらい違いだ。保育園の頃からの腐れ縁で何かにつけて俺にかまってくる困ったやつぞ。

「うわあ……」

織戸は俺の弁当を見てマジで引いたようだ。

頼むから、その死にゆく動物を見るような哀れみの目はやめてくれ。

「さすがにそのポケは体張りすぎだろ？やりすぎは笑えねえ」

首を横に振りながら、隣の席から椅子を引っ張ってきて、普通の弁当箱を机の上に広げた。

「俺、卵焼きが好きなんだ」

そう言い訳しながら一口食べようとするが……箸がついてねえ。

なんて凡ミスしてくれてんだあいつ。そして箸を取ってもどってきた俺は目の前に広がる黄色い悪魔と戦うことになった。

勇気を振り絞り一口分を一気にいった。

「ふむっしー」

思わず変な声が出た。

とてつもなく美味しい。でも・・・だ。

弁当ひとつ分はさすがにいらねえ。と言つ事で俺は交渉に踏み切る事にした。

「和人、織戸。俺は今、とてつもない卵焼きを持っている。少しでいいから、その日本人の魂と交換してくれ。マジで」

「ああ、まあ別にいいけど」

「はあ？ だったら最初から飯いれてこいよ。変なボケをするから・・・」

二人ともちゃんと交換に応じてくれた。口の中に銀河が広がるほどの美味さに二人とも目を丸くした。

「おい！ 相川の卵焼きがすごいぞー！ 今なら白飯と交換してくれるぞうだー！」

おいおい織戸君。大げさな事をしないでくれたまえ。ゾンビって結構、静かに暮らしたい小心者なんだぞ。

その言葉を聴き、何人かが俺の許へやってくる。やれやれ仕方がない。卵焼きは山ほどあるのだ。分けてやるつではないか。

最初はそう思っていたが、気づいたときにはごはんのみとなってい

た。愕然とした気持ちになった俺に和人がかけた「ドンマイ」という言葉がやけに心の中に響き渡った。

和人 s i d e

午後の授業も無事に終わった。アユムが太陽光をあびて、カッサカサになっていた以外は・・・特に何もなかった。

夕日に照らされたグラウンドを見ると陸上部が元気よく走っていた。ああいうのを見ているといいなあ、と思える。何かにひたむきに

なれる人というのはすごくほほえましいものだ。

今教室には、ほとんど生徒が教室にいなかった。どうやら今日も織戸が最後に帰るようだ。

「そういえば、お前ら最近帰るのが遅いな。学校でなにやってるんだ。」

少し考え、

「いや、生徒会の仕事が残ってるんだ」

そう、俺はこつ見えて生徒会の副会長だ。まあ、生徒会と言ってもほとんど名ばかりみたいなのだが。

「はあ、相川は？」

「寝てる」

「あんだけ寝てたのにか？」

と言いながらアユムの背中をベシベシとたたく。正確には太陽と戦って倒されたと言っほつが正しいのだが、

それをいっても何もならないので黙っておく。

「家が近いから、別に大丈夫だろうけどさ。最近、殺人事件が多いじゃん？ 気いつけるよっ。」

確かに最近はばらばら殺人が起こっている。恐らく同一犯による犯行だろう。

そして、アユムを殺したのもそいつだろう。しかし、今は、俺達はそのいつを探さなければならぬ。決してアユムのためではない。俺は、・・・俺はそんな立派な人間などではない。ただ、自分が危険だというこの現状をなくしたいだけなのだ。

「まあ、俺は殺人犯に会いたいけどな」

その俺の考えている事を知ってか知らずかアユムも、会いたい、とそう言った。アユムはどうなのだろうか。

ただ、自分の復讐のためだけに戦っているのだろうか。

そう考えていると織戸が、

「そうそう、忘れてた。会いたいと言えばな、相川。俺の妹の友達なんだけどな、その連続殺人事件に遭遇し たらしいんだ。京子っていうんだが、和人も知ってるか？」

ん？生き残りだって？あの殺人事件には生き残りなんかはいないんじゃないのか？だからこそ、俺達はなんの手がかりも見つけられなかったのに、こんな近くに手がかりがあるなんて・・・

「悪いけど覚えてない。アユムはどうだ？」

「俺も知らない名前だな。どんな子だ？」

聞くところによると十四歳で、年のわりには背が高く、胸が大きい女の子だそうだ。しかしここまで言われても心当たりは全くなかった。

「全く覚えがないけど・・・」

「俺も同じくだ」

「ふむふむ、二人とも知らないが、京子は知っている。つまり一目ぼれと見た！」

にへら。とバカみたいな笑顔を作る。もう目は変態のようないや、もはや変態そのものの目になっている。

「それだけで決め付けるのは、どうかと思うが」

「どっだけお前らの事を聞かれたか・・・。。絶対お前らに恋してるって！」

「ちょっと、ちょっと待ってくれさすがに俺達どっちにもってことはないだろ」

「そんなの気にするなって」

気にするわ！・・・しかし、殺人事件の手がかりを運んできてくれたんだお礼としてなら・・・。

「なら、とりあえず会ってみるよ。明日の夕方でもいいか？」

「おう、そう言っとく。そういえば最近相川ん家行ってねえな。昔はあんなに通いつめたの」

それは、お前が無理やりいつもついてくるからだ。しかし、まずいな。

「久々に寄っていいか？」

やっぱりこうなったか。ここで俺が言うのは不自然なので、アユムにアイコンタクトで、断るように伝える。

「ダメだ。ほら、……いろいろ大変なんだよ。一人暮らしつてのは気楽なもんだが、忙しいんだよ」

何が大変なんだ？と言われてしまったら終わりだったが、幸いにも織戸はそれ以上追及せずに、

「それは仕方ないな……」

織戸は、悲しそうな瞳を窓ガラスのほうに向けた。それを見ていると罪悪感がこみ上げてきたので、

「なら、今度ボウリングにでも二人で行こう」

実はこの男ボウリングが大好きなのだ。

「よっしゃ！久々に漫画本一冊かけて勝負だ！明後日いこうぜ！」

腕をグリングリンと回して、織戸が、口の端を吊り上げて笑う。

その後、他愛無いお喋りを楽しみ、織戸は、一足先に退室した。足音が少しずつ消えていくのを聞きながら、窓の外を見てみると、とてもいい天気だった。俺は一度目をはなしてカバンの中の本を手にとる。

「ん？なんだあれ？」

アユムのその声を聞き一度手に取った本をなおし、外を見てみるとキラリと光るものが俺のすぐ横の窓に追突。耳障りな激しい音を立てて何者かが、突っ込んできたと理解するまでに数秒かかった。

それは、ザリガニだった。学ランを着ていて、大きさは一般人の約二倍の大きさだった。

「魔装少女の魔力を感じてきてみれば……………」

ザリガニは学ランにふりかかったガラスの破片をハサミで叩き落しながら、ぬいぐるみのようなくりくりとした目をアユムに向け、

「魔装…………少女？」

腑に落ちないとも言つかのように首を傾げる。それは実に人間味あふれる動作だった。

「何者だ？男の魔装少女とは珍しい。それにずいぶん小さな魔力だ。貴様、本当に魔装少女か？」

瞬間、なにか違和感を感じた。その正体をつかむ前に、

「否定したいんだが、一応魔装少女となっている」

アユムがザリガニに向かって言葉を放った。それを見て今は余計な事を考えないほうがいいな。と思い、目の前のザリガニに、注意をはらう。

「まあいい、この辺りには複数の反応があるな。そちらに期待しよう」

「こいつ等は確かメガ口って言ってたな。」

「ん、一つはここに向かっておるな……好都合だ。魔装少女を二人も殺せるとはな」

このザリガニの言葉から察するに、ここにはハルナ以外にも魔装少女がいると言う事か。魔装少女の使命は、メガ口を倒す事じゃなかったのかよ……と、ついつい愚痴めいたことを考えてしまった俺を責められるものはいないだろう。

そんなとき、ゆらゆらと風に揺れるカーテンの横に、それはあらわれた。

Tシャツにパンツ一枚手にはチェーンソウとなかなか奇抜な姿でハルナは現れた。

「アユム！何やってんの！早くメガ口をけちよんけちよんにしろ！」

「ふおっふおっ！これはこれは！またハズレだったか！残りに期待させて貰うとしよう……貴様らを 殺してな！」

ザリガニははさみをガチガチと動かしながら軽快に笑っている。まるでバルタンのようだ。ハサミはちがう形ではあるが……

「アユム、早くやっちゃえ！って、こらっ！こっち見るなっ！」

なぜか苛立ち始めたハルナを見て、アユムはザリガニと対峙した。

「おい、ハルナ」

「なんだよ。黒ずくめさん」

「ここで戦ったら、この教室はどうなるんだ？」

「はん。そんなのアユムが直せる。魔装少女なんだから」

「だってさ、アユムがんばれよ」

「おう」

「ふおっふおっふお！さあ、始めようかっ！」

突如、ザリガニを中心にふわっと紫色の風が広がり戦いが始まった。

謎の力発現です。

紫色の風は、体にまとわりつくように吹き抜けていった。すると、「うくっ」「という声を出しハルナが自分の体を抱いた。

「何、これ………嘘」

「ハルナ？」

「黒ずくめ、さん……何このぞくぞくした感じ………」

そして、ザリガニがこっちに近づいてくると、ハルナが目を閉じ肩をピクツと上げた。

「ハルナ、もしかしてあいつの事が怖いのか？」

「ふざけんな！あたしが、メガロに恐怖するなんて………そんな」

そこで、言葉が途切れ座り込んでしまう。

まずいぞ……こんな所で身動きができないなんて………しょうがない………か。

「よっよっ」

「な、なにすんだ」

危ないと思った俺は、チェーンソウを持ったままのハルナをおんぶしたのである。

「あんなところにいたら、危ないだろ。それに、アユムの邪魔にもなる」

「……………」

ハルナも納得してくれたのだろう。なんにも返事は返ってこなかったが、うなずいた気配はあった。

しかし、戦況のほうはあまりかんばしくなかった。アユムの右腕が切り落とされてしまったのである。どうやらあのザリガニはスピードがはんばなく高いらしい。

「アユムー！」

ハルナが心配するのも無理はないだろう。だがしかし、この怪我で死なないとは言ってもこれでアユムの攻撃力は大幅に下がってしまった。

そして、じりじりとすり足をして距離をはかる。どっちにもまるで隙がない。ここは、先に動いたほうが負けの我慢比べだ。しかし、

「アユムー！さっさと魔装少女になれよなー！」

「ちょっ、まてって、うわあー！」

いきなりハルナがチェーンソウを投げ渡し、あまりに急な行動だったため俺はバランスを崩して倒れてしまった。

「なにやってんだよっ……このばかっ……！」

ちなみに倒れる寸前に体をひねり、ハルナは下敷きになっていない。

「ばかはお前だ！」

「なんだとっ！このばーかばーか！」

これ以上言っても時間の無駄なので無視しておく。それよりアユムだ。

そう思いアユムの姿を探してみると、アユムはちゃんとチェインソウをキャッチしていた。無論その過程だろう。いくつか傷が増えている。

「呪文を唱えろ！」

ハルナの命令はちゃんと届いたようだ。アユムは呪文を唱えた。そう、魔装少女になる為の呪文である。

「ノモブヨ、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャー、デー、リブラー！」

すると、アユムの制服がはじけとび、光が集まってきた。

そして、光が一つに集まり、アユムの体にコスプレ衣装がコーディネートトされる。それは、ハルナが着ていたものである。鳥肌がたつほどの存在感がある。無論、アユムがそんなものを着ているということ

は、
「うわぁ、気持ち悪いな・・・」

「聞こえてるぞ、和人！」

「だが、事実だと言う事を受け止める」

「くっそお」

「なにやってんだよアユム！早く……早く行けよなっ！」

ハルナにせかされ、しびしびと言った感じに向き合った。

ザリガニも相当警戒している。しかしそんなザリガニをふつとばし、アユムはラッシュを決めて、倒れこむザリー（この時にハルナに聞いておいた）に赤く発光し、回転するチェーンソウをたたきこむが、防御されてしまう。

「ふん、私はこれまで六人の魔装少女を殺したが、貴様が一番厄介だ。それに……奇怪だ」

「奇怪はおたがいさまだろう」

空気が震えるような、そんな緊張感がある。

すると、ザリーの右腕が突き出され、その大きなハサミがとんだ。

「うわっつ」

二重に聞こえた事に疑問をもち、廊下の奥を見る。（戦いは、廊下で行われ始めている。）

そこにいたのは……

織戸だった。

それはそうだろう。教室から騒音が聞こえてきたら、それは気になって様子を見に来るだろう。

アユムもそつちに気を取られていたのか、ザリーの攻撃を受けて紙くずのように吹き飛ばされる。

「ちょっとじじで待ってる」

「黒ずくめさん何する気だ？」

「織戸を避難させる。だからすこし待っていてくれ」

「分かった」

ハルナにそういって、今度はアユムに、

「織戸は、俺が避難させる。だから、お前は戦いに集中してくれ！」

「ああ、頼むぞ……」

そう言って、織戸のいるとこじろに慎重に進んでいく。

あと、二メートル・・・一メートル・・・よし。

「織戸。怪我はない・・・みたいだな」

「なあ、和人何が起きてるんだ？」

「ああ、そのことについては後で説明する」

ちょうどその時、轟ッ！という音がした。

何事かと目を向けてみるとすごいスピードでザリーのハサミが飛んできた。

くそっ！せめて織戸だけでもッ！

そう思い織戸を横にありったけの力で突き飛ばした。もうハサミは目の前だ避けてる余裕は無い。

「和人ッッッ!!!」

アユムの痛烈な叫び声がひびく。

こんなところで、こんなところで、俺は！俺は！

死にたくないッ!!

そして俺は硬く目をつぶった。

?おかしい。痛みも何も感じない。でも、轟ッという音はしている。おそろるおそろる目を開いてみると、

「なっ!?!」

なんと、俺の周囲に漆黒の炎が俺を守るように広がっていて、ハサミはそれに止められていた。そして次の瞬間。ポッ!という音がして、一気に燃え尽きた。今のは?

「おい、和人大丈夫か?」

「ああ」

「そうか、でも今の何なんだ?」

「それが俺にも分からないんだ」

アユムと話をしていると、ハルナがチヨ「チヨ」と気絶しているら

しい織戸に向かって歩いて織戸の額を触る。すると、織戸の体から力が抜ける。

「おい、何してるんだ？」

「記憶操作。この辺一带は今のあたしじゃ無理だから、あんたがやれ」

「へいへい」

そうしてアユムは、開始するが傍目には立っただけにしか見えない。

「？」

直後、目に違和感があった。

「どづじた？」

「いや、ちょっと」

目がよく見えない。なんだ？と思い、汗を拭くため眼鏡を取る。するよ、

「あれ？」

「おい、本当にだいじょうぶか？」

「いや、大丈夫だ。けど、目がよく見えるんだ」

「はっ？」

そうなのだ、眼鏡を取るととてもクリアに景色が見える。

「なんで、そんなこと？」

「さあな。少なくともあれには関係してるだろうな」

そう言っ外に目を向けると、そこにはもう、部活をしている人はいなかった。

これはゾンビですか？いいえこれはソードスキルと言っんです。

ザリガニに襲われた後、俺達は、家へと帰っていた。

しかし、アユムはあのコスプレのままだったので少しばかり人目を気にしながら、だが。

まあ、あのコスプレは脱いでしまうと裸になってしまうのじゃないと言えましょうがないのだが。

しかも、俺の右隣を歩くのはTシャツにパンツ一枚ではだしの少女である。

ちよつと変質者と露出狂に両脇を挟まれてる感じである。

俺に、不思議なものを見るような視線が集まっているのもいたしかなないことなのか、納得してはいけないのか……

あえて選んだ暗くて静かで狭い道を三人で歩く。しかし、それが余計にアユムの怪しさを際立たせている。

まあしかし、もうすぐ家である。

横のアユムのいらいらもピークに達しているみたいで、先ほどもハルナと口げんかをしていた。

ちなみに、俺はもう眼鏡をかけていない。度も会ってないし、かけていても邪魔だからである。

そして、今日の前にあるのがアユムの家であり、俺の居候先である。

五十、六十坪ほどの大きさがあり、今この家に居るのはハルナをあわせると四人だけである。

ちなみにアユムの両親は、新婚旅行の名目で五年ほど家を空けている。

いくらなんでも新婚旅行は無理があるだろうと、アユムに突っ込んでしまった俺を責めることの出来る人はいないだろう。

お先にハルナが入ってしまったので、俺も入る事にする。(家主が一番先に入る事になっているが、ハルナが先に入ってしまった以上関係ないだろう。

とりあえず、部屋に戻り制服から、私服の黒のTシャツとジーパンに着替え、制服をクローゼットに戻す。

そこで、ふと目に付いたのが真っ黒の剣と同じく真っ黒のロングコート。である。

これが、神様(?)がくれた二つのものである。そう神様(仮)は能力はくれなかったのだが、道具はくれたのだ。

しかし、真っ黒の剣『エリュシデータ』はむちゃくちゃ重いし、コートは何の変哲もない普通の古臭いコートだった。

(だけど、あの変なのが起きたって事は……)

そう思った俺は、部屋の扉をしめて(恥ずかしいから)『エリュシデータ』を持ち上げる。

「おわっ」

持ち上げてみて、びっくりしてしまった。鉄骨を持つてるみたいな手ごたえだったはずなのに、せいぜい肉厚のパイプ程度にまで軽くなっていたのだ。

「レベルアップしたみたいなかんじなのか？ いやそれよりも……」

そして、ロングコートを羽織ると

「?つくっ!」

不快な酩酊感が俺をおそった。

「なんだ……何が頭の中に？」

いろんな情報が頭の中に流れ込んでくる。

『ソードスキルの発動方法』 『メニューの出し方』 『索的スキル』
『隠蔽スキル』 e t c . . .

まずメニューを出してみる。

「これは……まんまSAOのだな。体力とログアウトボタンはないけど……」

ために、ソードスキルを出してみる事にする。

単発水平斬撃技『ホリゾンタル』

「シッ！」

光の軌跡を残し、前方に振り切った状態で技の発動が終わる。

「硬直時間はないけど、ソードスキルに同じソードスキルはつなげられないみたいだな・・・」

次は大技でいこうと思い、開始動作に移る。

三連重攻撃『サベージフォルクラム』

水色のライトエフェクトをまとった剣がきらめき、ものすごい速さで振りぬかれる。

「これなら」

これなら・・・俺も戦える。

部屋を出て、居間に向かう。無論コートなどはアイテムボックスに直している。

居間からは、バラエティ番組の楽しげな笑い声が聞こえてくる。

その前で正座をしている女の子は、あのコンビニの前であったあの銀髪の女の子である。

名は、『ユークリウッド・ヘルサイズ』通称『ユー』である。

「今日は何もなかったのか？」

すると少女は首も動かさずにちらりと俺を見ると小さくうなずいた。本当に顎を少し引くぐらいの小さな動き

である。

そして目を戻し、テレビを見つめる。楽しそうな声が聞こえるバラエティ番組だが、ユーはくすりととも笑わない。

そして、もう一度俺のほうを見ると黒色のボールペンを手に取り、テーブル（なぜか、五角形である。珍しいな。）の上においてあるメモ帳からメモを一枚きりはなし、トントンと二回、テーブルをノックする。

メモを見るという合図である。そのメモには丸ゴシック体のような字体で、

「（飯の用意を）」

ボールペンの書く動きは見えなかったが、

「何か食べたいものでもあるか？」

「ステーキ・ブン・セガール」

いや・・・無理だって。それは無理があるから。

そう思っているとアユムとハルナが下に降りてきた。

ハルナは、さっきのTシャツにジーンズをはいている。あれは多分アユムのだろう。

ハルナは俺の向かいに座りテーブルに肘をつけて、まるで何かを観察するようにユーを見ている。

アユムはこの場を何とかするべくいくつかの話題を切り出す、二人とも無視。

「黒ずくめさん、ご飯まだ？お腹空いたんだけど？」

「(肉がいい)」

今作るから、まっててくれって。そういえば料理スキルは関係ないか。

「豚キムチで言いか？」

「うんそれでいい」

ハルナは笑顔を見せるいつもそうしてくれるとひじょーーーーーに助かるんだけど・・・

「(素敵)」

ユーにも好評(多分)のようだ。

では、豚キムチを作りにいこうかな。

居間で五角形のテーブルの上の豚キムチ、サラダ、そしてご飯がある。三人分のだ。アユムはコンビニ弁当である。作ってる側としては大いに不快なのだが、

「黒ずくめさん、おかわり！」

元気よくハルナが茶碗をわたす。ユーも茶碗を出す。いささか食べすぎなのではないだろうか。俺はもう食べ終わったんだけどな。すると、アユムが口を開いた。

「そういえば、今日の卵焼き、うまかったぞ」

「あ、当たり前だ。あたしを誰だと思ってんだよ」

いつのまにかアユムは、ニヤニヤとニヤニヤと気持ち悪いほどのスマイルを見せていた。

「何笑ってんだよ。気持ち悪い……死ね！バーカっ！」

気持ち悪いと思ってるというよりも照れ隠しのほづが強いようだ。

……そのときだった……

パン。と乾いた音がして、俺は思わずびっくりしてしまった。

なんと、ユーが身を乗り出してハルナの頬をたたいたのだ。

そしてユーはハルナにメモを突きつけて、

「（軽々しくその言葉を使うな）」

「ユー、別にハルナは本気で言ってるわけじゃないんだからさ」

すると、ハルナが「だあーっ！」と奇声を上げ、

ハルナは口の中に「ご飯を掻き込む。ユーもすまし顔で食事に戻る。

「めっちゃおかわりだ！お・か・わ・り！」

「分かった、分かったから大声で叫ぶのはやめてくれ」

そしてご飯を山盛りにする。

「私は味噌汁を頂きたいのですが？」

はいはい、味噌汁を……えっ、お前誰だよ！

これはゾンビですか？～来ましたよバトル回です。

いきなり現れた彼女に味噌汁をついだ俺は、とりあえず彼女についての情報が欲しかったので質問を投げかける事にした。

「えーっ……とき、自己紹介とかして貰えると助かるんだけど何か言ってもらえるか？」

すると彼女は味噌汁を置き、

「わかりました。私の名はセラフィムです。」

セラフィムって天使の名前であったような気がするんだけど気のせいだろうか？

「……………」

で？

「……………」

ああ、うん。

「……………」

話す気がない、ときたか。

しかし、どうやら一名納得できなかったものがあるようで（決して俺も納得しているわけではない。）

「それだけ？好きなものとか特技とか、趣味とかあるじゃん。あ、あんなもしかして魔法使いか！あたしを爆破する気だな」

ハルナ。お前が思ってる魔法使いっていったい何なんだ・・・？

「好きなものは秘剣、ツバメ返し。特技は秘剣、ツバメ返し。趣味は秘剣、ツバメ返しです」

真面目に答えてこれなのか、答える気がなくてこれなのかによって、接し方が変わると思う。

「何でこの家に来たんだ？」

「任務です」

「どんな任務だ？」

「ユークリウッド・ヘルサイズ殿に、お力をお借りしたい」

ユーの方を見ると、我関せずとも言うように黙々と箸を進めている。

ユーはよく命を狙われる。人を蘇らせるちっからを持っているんだから当たり前かもしれないけれど・・・。

ん、そういえば来たやつといえば吸血鬼に吸血鬼、吸血鬼だった。だったらこのセラフィムさんも吸血鬼ではないのだろうか？

「あんだ、もしかして吸血鬼か？」

俺の予感にあたっていたようで、セラフィムさんは驚愕に目を見開

いていた。

しかし、すぐに平静を取り戻し

「その通り。私は、吸血忍者です」

吸血……忍者？

話を聞くと、人の生き血を吸うことで若さと力を得た忍者らしい。

吸血鬼から忍者にではなく、忍者から吸血鬼。いや、むやみに血を吸わないのだから鬼ではないのかもしれない。

山奥でひそかに暮らしていたのだが、頭領が死に跡継ぎ問題から戦争、それが百年以上続いているのだという。

「ん、なら……これまで来た奴等も」

「はい、吸血忍者でしょうね。彼らはヘルサイズ殿の命を奪い、たぐいまれな力を我が物にしようと企んでいました。それは私達の目的を阻止する事と同義です」

そして、と彼女は続けて

「私の任務は、ヘルサイズ殿に動向を求める事と、その命を守る事にあります。誘拐しろという強行な考え方を持つものもたしかにいますが、私達はヘルサイズ殿に敬意を払っております。できるだけ、ご本人の意思でお越し願いたい」

ということらしい。食事は終わり、皿だけが残ったテーブルの上にユーがメモとボールペンをのせ、

トントン。二回テーブルが叩かれた。

「(和人 かまわない 追い返せ)」

交渉決裂……か。

しかし、命を守ってくれてると言っているのだ。それが本当なら心強いのだが……

「追い返さなくてもいいんじゃないか？」

そういったのだが、またユーがテーブルの上をトントンと叩く。もう一度見るといつているのだ。しかしいつの間にか書き加えられている。

「(和人 かまわない いいから追い返せ)」

うわあ、きつついなあ。

すると歩が、

「おい、ユー、和人は戦えないんだぞ。どうやって追い払えっていうんだ」

しかし、ユーは何も動きを見せない。まさか……戦えるのばれるのか？

いや、別にかまわないけどさ。隠してるわけじゃないし。

「なら、あなたを倒せばいいんですね」

「へえ、まるで俺を簡単に倒せるみたいな口ぶりだな」

「ええ、事実ですのよ」

おもわず片頬が上がってしまっ。

「なら、どこか人気のない場所に移ろうか」

「おい、和人」

と歩が心配そうに話しかけてくる。

「大丈夫だ。俺を信じろよ親友」

そして、俺とセラは人気のない所に向かった。
人気のないところといえば、あそこしかない。

墓場は今日も静かだ。

人が寝静まる時間でこそないが、夜の墓場には来たがる人などいないだろう。

ハルナとクマッチが出現したときのクレーターはもう綺麗になくなっていく。

墓場の奥に行き、巨大な木の下へ。

この周りには墓石もないし、行動は制限されない。

俺は、アイテムウィンドウの装備フィギュアの画面にしたままセラとにらみ合った。

セラの威厳あふれる表情は、こうして今から殺し合いを始めようとしているのに相も変わらずきれいだっただ。

「一つだけ聞いていいか？」

「何か？」

「吸血忍者は人を襲うのか？」

「もちろん。と言っても、殺したりはしません。少し血を分けて貰うだけです」

「強行派も？」

「絶対とは言い切れませんが、絶対にしません」

「だけど、今、俺を殺そうとしているじゃないか」

「目的の為なら仕方ないでしょう？」

「そうか」

そして、ヒスイのような綺麗な瞳が真っ赤に染まり、全身を覆うような黒いマントがあらわれた。

俺もコート・オブ・ミッドナイト、エリユシデータを装備フィギュアにセット。シュワツという音と共に、黒のロングコートに黒の片手用直剣、その他黒のブーツに黒のズボン黒のインナーもセットする。俺の体にまとわれた。

「あなたも吸血忍者なのですか？」

「いや、俺は一般人だ」

「そうですか」

そしてセラが両手を広げると、どこからか緑色の葉が落ちてきた。上に大きな木があるとしても説明のつかない量である。

「いきます」

そういうとセラはものすごいスピードで接近してきた。

俺は切りかかってきたセラの剣をバックステップでかわした。が、

(予想以上に浅い？まさか！)

すると、さっきの斬撃よりも数倍の速さで葉っぱで出来た剣が俺に襲い掛かった。

避けるのは無理だと判断し、剣にライトエフェクトを宿した垂直斬り《バーチカル》が発動し、稲妻のようにきらめいた剣で攻撃を弾く。

(あれは、ツバメ返しか。自己紹介のときを思い出していたらもっと早く対策が練れたんだが)

ともかく自分から接近しないと始まらないと思い、剣を上段に構えて黄緑色の光の帯を引き繰り出される一撃を放つ。上段片手剣用突進技《ソニックリープ》

思い切り地面を蹴り、相手の懐に飛び込む。

ズガッと言う音と共に剣は命中した。しかし、

「丸太・・・か」

セラを探そうとした時、俺のすぐそばを何かが通過した。右頬に痛みが走る。

周りを見ると、

「なッ・・・」

周りの木の葉が上へと舞い上がっていた。

上にはセラがいて、その周りにはたくさんの葉があった。

(あれが全部剣になってるとすると・・・やばいな。)

「木の葉の如く舞い飛ぶ剣、即ち」

木の葉が俺に向かって飛んでくる。

「秘剣、百鬼惨殺」

第三者 side

「やりましたか？」

そう言い、セラは和人のいた場所を見ていた。

秘技、百鬼惨殺が襲い掛かった場所は砂煙で見る事はできない。

「まあ、あの攻撃に耐え切れるとは思いませんが」

そうセラが言った直後、木の周りを覆っていた砂煙が晴れた。

「なっ！」

セラが驚いたのも無理はない。なぜなら百鬼惨殺が襲った場所には、黒衣の人物がいたからである。

そう、

和人である。

さすがに、傷は負っているようだが致命傷になるような傷には至っていない。

そして少年は不敵な笑みを浮かべ、セラの方を見て、

「オオオオオオオッ！」

見た目に合わないような雄たけびをあげ、猛スピードで走っていく。しかし、それはセラに向けてではなく

(木に向かって?)

そして和人は木に足をつけ、そのまま登っていく。(壁走り)という言葉スキルである。

和人はセラがいる高度にたどりつくとも木を思い切り蹴り、セラの懐に入ってソードスキルを発動した。

しかし、

(先程と同じ技を使うとは・・・)

そう和人が操る剣の動きは先程、セラの剣を弾いた技の動きと寸分も違う。

無論セラは、その技を受け流す。

しかし、彼女は見た。彼がほんの少し笑みを浮かべたのを。

(なぜ?)

その疑問は次の瞬間明らかになった。もはや、軌道の修正も出来ないほどの勢いで下に向かった剣は見えない壁に当たったかのように急に軌道を変えて、セラに襲い掛かったのである。V字の軌跡を描き、対象を切りつける二連撃技《バーチカル・アーク》

その技はセラの剣を叩き折ったものの、相手に与えた傷は浅い。しかも剣を叩き折ってもさして意味はないのである。なぜなら、周りにある木の葉を彼女は剣にすることができるとのだから・・・

だが、和人の動きは止まらない。彼は重力に逆らうかのように、サマーソルトキックのようにけりを放つ。足がライトエフェクトにつつまれた事を見ると、これもソードスキルらしい。けりを食らったセラは先に地面に落ちる。

(くっ)

だが、さすがは吸血忍者というべきか、すぐに体勢を立て直す。しかし、和人の猛攻はとまらない。

セラを目掛けて雷撃をまとわせた剣を振り下ろす。

セラはその剣を避けるが、剣が地面に突き刺さったとたんに周りに電撃がはしり、セラを襲う。

片手剣スキルのなかでは珍しい、重範囲攻撃技《ライトニング・フォール》だ。

電撃によって痺れ、身動きが出来ないセラに向かって少年は歩く。

キリトside

危なかったな・・・

あの百鬼斬殺という技を《スピニングシールド》で防ぐことができなかつたら、間違いなく死んでいただろう。

とりあえず俺は、ポーチから解毒結晶をセラに使う。
動けるようになったらしいセラが、

「あなたは一体？」

「だから、言っただろう。一般人だ。

少し、人とは違う技を使えるけどな。

・・・で、あんたはユーの事をあきらめてくれるのか？」

そしてセラは少しの間黙考すると、

「はい。私は家に帰らせて頂きます」

ポニーテールを揺らしてぐるりと背を向けて、消えていった。

何にしても無事に丸く収まってよかった。

・・・何か、買って帰ろうかな。

俺がコンビニでパンを食べながら、家の玄関に帰ると違和感を感じた。

というか、靴が一足増えているのだ。

もしや、と思い今をのぞくとそこにはセラがいた。

・・・なんで？

どうやら家＝歩の家

だったらしい。

セラは、何故か俺の下僕になると言い（ユーの近くにいるためだろ）それを俺はやりわりと断った。

そのあと、いろいろ話をして歩の下僕になるということで話は収まった。

状況悪化してんじゃないか・・・。。

「これはゾンビですか？先生だよー」

「おい歩。そろそろ京子に会いに行こうぜ」

「おう、和人も行こうぜ」

「ああ、今行くよ」

あのセラと戦った後日俺達は連続殺人事件の生き残りである京子に会うべく学校を出ようとしていた……のだが……。

「桐ヶ谷君。こっちこっち」

「先輩？どうしたんですか？」

「いや、会長がいきなり生徒会全員を集めろって言ってたから呼びに来ただけど……もしかしてじゃまだった？」

「えーっと……歩、織戸。今日は行けそうにない」

「ああ、大丈夫だ。今日のことはまた後で話す。じゃあな」

ため息を吐く俺に、

「ごめんね和人君」

「いや、かまいませんよ。行きましょう 先輩」

正直に言おう。

俺は、この人が苦手である。

「結構、時間がかかったな」

日没寸前まで、学校に残っていた俺達生徒会はようやく仕事を終えていた。

それなのになぜまだ帰らないのかというところ、

「まさか、見回り決めのじゃんけんに負けるとは……………」

というわけで、絶賛見回り中というわけである。

「普通こつこついうのって先生がやるんじゃないのかよ。栗須も何やってるんだ」

という愚痴めいた事を唱えながら（というかもろに愚痴だ）三階の理科室につくと……………

「なんか白い煙が……………」

ぼやだろつか？いやそれでも誰が？

とりあえずすぐ近くにあった消火器を持ち、理科室の中に入り煙の中心に向かって消火器を噴射する。

すると、

「ふみゅっうううー！！」

「っわぁっ？」

すると、煙の中から声が聞こえた。

何か聞こえた。何か。そう思いながら、煙のおさまった場所を見る
と……………

「女の子っ。」

泡だらけの女の子がいた。

「何するのもしー」

「じゅめんなさい。本当にじゅめんなさい」

只今、少女（幼女？）に土下座しています。でもね、皆さん。これぐらい人生で一回はあるって、阿良 木君も言ってたよ。まだしてない人もこれからするんだよ。

まあ、幼女も床に座ってるから対等だけど。（どこが？）

すると、俺のハンカチで泡を拭いていた幼女が、

「もう顔あげていいよ」

お許しがでたので、顔を上げる。

「アンタ・・・あなたは誰ですか？」

「え、ああ、ふふん、私はねえ」

そのときであった、目の前にいた少女はだんだんとおっさんになっていくではありませんか。

というか、その姿は普段から良く見ている、

「栗須先生？」

「やばいー」

そういうと先生は、机のしたにあった酒を飲む。すると、どンドン少女になっていくではありませんか。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

気まずい沈黙が流れる。そこで栗須先生がとった行動は、

「私の名前はねえ」

（なかつた事にする気だ・・・）

「クリスマスだよ。よろしくう！」

「ああ、うん、よろしく」

「何？乗り悪いなあ」

衝撃的な出来事があったのにそれを無視し、そのうえ、乗りを求めてくる。何様だよお前……。

「で、あれは何なんだ？」

「あれって？」

「いやほら、栗須に……おっさんになったあれだよ」

すると、クリス（自称）はビクッと体を震わせて、

「見た」

「うん見た」

「ふみゅっうううー……」

変な声を出し、

「そつだよークリスは栗須だよー」

「へえ……先生がねえ……」

そつだ、こんな変な力を持つてるならもしかして連続殺人事件のこ
とを……

出て行くこととした瞬間、

「ああ、待って」

呼び止められてしまった。何事かと振り向くと、

「また、この時間帯にいつもいるから・・・おつまみ持ってきてくれたら相談乗ってあげるよー」

「はい、それではまた。先生」

「この姿のときはタメ口で、クリスマスって呼んでね」

「ああ、分かった。クリスマス、行ってくる」

「いってらっしゃーい」

そして、窓から屋上に上り、民家の屋根を足場に夜空をかけていく……………。

「これはゾンビですか？ ～VSアリクイ～」

あの音の正体だが、それに関しては理科室から外に出た瞬間にはすでに分かっていた。

それは、

「クジラなのか？ ずいぶんデカイな」

その音の正体はクジラのメガロのせいだったのである。

より性格に言うのなら、クジラのメガロが出した潮のせい……なのだが。

ともかく、その潮のせいで町は水に沈みそうになっていた。

「これはやばいと思い加勢に出ようとした瞬間、

『ドンッ』と大きい音がして、一歩進んだらそのままぶつかってしまい
そんな距離にメガロが現れた。

（アリクイのメガロ……かな？ ボクシングの構えをとっているのを見るに、徒手空拳か。

そう思っていると、……いや思っている暇など本当はなかったのだ。
なぜなら次の瞬間、アリクイ（仮）はすさまじい速度で俺の顔にむけてのジャブを放ったのだ。

「くっ……」

間一髪、俺は首を傾けてそれを避ける。

追撃されないように、ありったけの力で別の家の屋根に飛び移る。そこは、そこそこ広くて割と戦いやすそうな場所だった。

いつアリクイがこっちに飛び移り俺に攻撃をしかけてくるのか分からないので、俺は背中に吊ってあるエリュシデータを抜く。

対するアリクイは、ゆっくりとこちらに飛び乗り軽めのフットワークをしながらクリクリとした目でこっちを見つめてくる。

あれだけ動きが早くては、ソードスキルはよほど相手に隙があるときにしか使えない。

しかも、一つのソードスキルで決めなくては、スキル後の硬直時間をつかれてそこでゲームオーバーだ。

(ともあれ、あいつに隙を作る！)

「シッ」

短い気合の声と共に剣を自分に出せる最高の速度で振るう。

もちろんカウンターに対応できるように考えて、だが。

その攻撃は案の定相手の拳に防がれた。

そして、あいてがカウンターとして放ったジャブを弾き防御へパ
リイ」する。

攻撃、そして防御、切る、弾く、切る、防ぐ、切る、防ぐ、そしてまた切る。

無数の斬撃の音が、日の沈んだ空に鳴り響く。

とても長い、いやまだ一分もたっていないのかもしれない。戦闘の中で時間の感覚が緩やかになっていているせいでどれぐらいの時間がたったのか、長かったのか短かったのかも分からない。

だが、終わりは訪れた。

これまで、ジャブやストレート、フックなど拳を使った攻撃をしていたアリクイが、突如その長い舌で俺を貫いたのだ。

「ウツ………。お、おオオオオオツツツ！」

俺はその舌をつかみ、ありったけの力で引きちぎった。

そう、俺は避けられなかったのではない。避けなかったのだ、最小限の傷で済むように貫かせた。

アリクイはその痛みに耐えられなかったのだろうか。少し足をふらつかせる。

少しの間、しかし俺にとっては大きな隙だ。

俺はソードスキルに設定された動作を瞬時にとり、剣にライトエフェクトが宿る間もおしめ技を放つ。

黒のライトエフェクトを宿した俺の剣が半ば勝手にアリクイの体にすいこまれる。

片手剣最上位剣技『ノヴァ・アセンション』十連撃。

日が沈んでいるにも関わらず、はっきりと濃密な黒の軌跡が見える。

それはまるで黒炎をまとっているかのようだった。

全十発。その全てがアリクイの体に叩き込まれ、アリクイは倒れ、そして四散。

俺は少しの間息を整え、そしてアユムたちと合流するべくアユムたちがいる家屋の上に向かった。

クジラはもう倒したようで、みずはもうすっかり引いていた。

少年の激昂

キリトside

あのあと、俺はアユム達と合流し（俺の姿を見たハルナが少しうるさかった。あと、アユムは少し俺の姿を見てびっくりしていた）アユムの家の居間でくつろいでいた。

俺は貫かれたあの傷をポーションで回復中だった。

（じわじわと治っていくんだなあ。でも回復結晶はあと二つしかないし我慢するしかないか）

と、疲れでやや散文的になっている俺の横で、アユムはユーに話そうとしていた。

心配でもしていたのかな、と軽い気持ちで耳と顔を（ユーが何を言ってるのか分からないから）傾けてみる。

そして驚いた。

アユムside

居間ではいつものようにユーがお茶を飲みながらバラエティ番組を見ている。

「今日は大丈夫だったか？」

首も動かさず、ちらりと目だけを動かして俺を確認すると、一つ頷いた。いつもと同じく、アユムを少し引くといつくらの小さな動き

だ。和人が話しかけた時の方が若干動きが大きいような気がするが多分気のせいだろう。

ハルナは二階に上がってしまっている。セラはテーブルを挟んで俺の前に座り、和人は俺の横にいてテーブルに頬を預けている。

「ユー聞きたい事があるんだが？」

俺の言葉に呼応するように、ユーが体をこちらに向けた。俺の声は少し威圧的になっていたかもしれない。その証拠に、和人はテーブルに頬を預けるのをやめた。

でも、それを抑えるつもりはサラサラなかった。

「俺たちが出会った日、ユーは俺を助けてくれたんだよな？」

銀色の髪が揺れる。肯定。

「じゃあ、俺を助けたあと、俺が意識を取り戻すまで時間があつたよな？その間何をしていたんだ？」

籠手に包まれた手がボールペンを強く握る。

「(歩の傍にいた)」 『お兄ちゃんと一緒にいたよ？』

可愛い妄想ユーの声も耳を通り過ぎていく。

「本当に？・・・お前に家族を殺されたって情報を得たんだ。おかしいだろ？被害者の人間と、訳のわからない力を持った人間と、どっちの証言を信じる？ユー、頼むから真相を説明してくれ！」

今まで以上に、首を横に振った。嘘は吐(つ)いていないと主張しているのだろう。

「歩、少し口調が強すぎませんか？ヘルサイズ様は嘘を言うようなお人ではない」

セラが間を取り持とうとしてくる・・・が、和人は何故か腕を組んだまま目を瞑っている。

「そうだな、少し強く追求してしまった。それは謝るぞ。・・・すまんかった。

———じゃあセラ、お前が判断してくれ。被害者側の人間がユ一の姿を指摘出切る理由はなんだ？

さあ、答えてくれよ。どっちの言葉に信憑性がある？」

「歩、少し落ち着いてください」

「俺は冷静だ。冷静に、真実を聞きたいんだ」

「(嘘は言っていない)」「『お兄ちゃん、信じてよー』」

「信じてやりたいさ。だから、そういう言葉じゃなくて、もっと簡単に確実な証拠はないのか？お前が人殺しをしていないっていう確証だ」

「アユム、」

すると、今まで黙っていた和人が声をかけてきた。

「何だ」

イライラしている俺はついその声にも刺々しくこたえてしまふ。

「それは、俺の事も疑ってる……っていうことでいいんだな？」

「なんでそうなるんだ」

「俺はユーと一緒にお前を運んだんだ。一度も目を離さなかった、ということはだ。ユーと一緒にいた俺の事も疑ってるってことでいいんだと言ってるんだ」

「だけど、ただの人間のお前には無理だろう」

「今日の事を忘れたのか？ 屋根の上から屋根へと飛び移ってきただろ？ それにセラとも戦って……勝ってる」

そういえば……そうだ。そう意識した瞬間に和人にも疑念がむくむくと頭をもちあげてきた。

「なら、お前なのか？ 俺を殺したのは？」

もう何がなんだか分からん。

「それを証明してやるよ。明日の夜に墓場に来い。魔装錬器も持ってきた」

「何をするつもりだ？」

そう聞くと少し自虐的に笑って、

「だから言っただろ？ 俺にお前が殺せるかどうかの証明だよ」

「次の日」

俺の今日の学校生活についてはほとんど覚えていない。

俺の前にいる、和人が今にでも教室で誰かを殺すのではないかという疑念が起こってくるのだ。

少し前ならそんな事まったく思わなかっただろうが、今は違う。和人のことを疑っているせいでそんな事を考えてしまう。

そして深夜。

あの墓場に来たそして、大きな木の下。クマツチを倒したすぐ近くに和人は座っていた。

「よ、来たな。なかなか時間は忠実に守るんだな」

「それはそうだろ、あんな事を言われて時間に遅れてこれるわけがないだろうが」

それはそうだな。と飄々とした感じでいる和人に、耐え切れなくなっ

「ちっさと始めようぜ」

「焦るなよ。よいしょっと」

そう言って和人は立ち上がった。黒一色のファンタジー世界でよく見られるような服を着た和人が構えるのはこれまた黒色の剣だ。

そして、背中にはなぜかセラの葉っぱの剣をしょっている。

「もういいぜ」

「俺をなめんなよ」

俺は魔装錬器を持って突撃をかけた。

「いきなり200%だ！」

しかし、その攻撃は片手で持った剣で防がれる。

まいったね、和人は手に全く力をこめてるような気配がない。本当にただ立っただけみたいだ。

「なんで変身しないんだ？」

「そんなの、使うまでもないからに決まってるだろ。魔力なんて毛ほ

ども感じないんだそんな相手に変身するなんて……」

「甘いな」

そういつた瞬間和人の体から青色のとても鮮やかな魔力が間欠泉の如く流れ出した。

「毛ほども感じないだって？それは俺が魔力を限界まで抑えてたからだ。お前の察知能力は、俺が微弱に出している魔力すら感じられないほど低い」

そう言っつて俺のミストルティンを弾き、俺のみぞおちに蹴りをぶち込んだ。

「がっ……」

肺から空気が無理やり押し出される不快な感覚。

おいおい、これは俺が変身しないで出せる限界の300パーセントと同じくらいじゃないか？

「それに、毛ほども魔力を感じないから変身しない……だって？それは優しさじゃなくて傲慢だよ。」

アユム、本当にお前を殺した相手に復讐するならそんな甘い判断はするなよ。こいつには変身しなくてもいいなんてそんな考えを持つたままだったら自分より弱いあいてにだって負けるぜ」

言っつておくが、俺は俺の真髄をまだ出してないぞ。そう言いながら和人はゆるく立つ。

くそっ、そいつで言っつならなっつてやる。

「ノモブヨ、オシ、ハシ」

そこまで言ったところで和人の姿が一瞬掻き消え俺の目の前に現れ、俺の顔を殴り飛ばした。

俺はどここの誰かも知らない墓石を粉々にぶっ飛ばしながら転がる。

「魔法を唱えるなら敵の攻撃を避けながら、じっと立ったままなんて愚の骨頂だ。まあ、これはクリスの受け売りだけだな」

くそっ！くやしいがまったく歯が立たない。和人は剣すらまだ使っていないのだから。

いや、まてよこの砂煙を利用すれば・・・

俺は、ぎりぎり和人に聞こえないぐらいの音量で呪文を唱える。

「ノモブヨ、オシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラー！」

すると、俺の元から着ていた服がブリーン！と破け、その代わりに女の子が着たらさも可愛いだろっつというような服が俺の体を包み込む。

そして、砂煙が晴れてあらわになった和人をにらみつける。

「はあ、アユムにしては頭を使ったな」

と不敵に笑いながら話しかけてくる。

もう頭にきた。これはぼくぼくにしても気がおさまらん。

チエーンソウがルビー色に輝きながら動き出す。

「600パーセント!」

そして和人の剣とまた鏢迫り合いになる。しかし今回はじりじりと押している。

いける! そう思ったのだが。

「相手の剣を押し込んででも気を抜くなよ」

そう言つと和人は右足を滑らせるように後ろに出し、剣を肩に担ぐかと言つところまで後退させる。

いったい何がしたいんだ、とそう思うまもなく剣の周りに青色の魔力が瞬間的に集まりライトイエローの輝きを作った。

そして、和人の剣がすごい力で斜めに切りつける動きで進んでくる。

すごい力だ。これがさっき言っていた和人の真髄……?

とつさに受けきれないと思って後ろに飛ぶが、ありつただけの力で飛んだにも関わらず俺の胸板に少し深めの斬撃のあとが残る。

「これが、一応お前に教えられる全てだ」

「なにを……教える?」

「わからなくていい。いや、まだ残ってたな本当に俺にお前が殺せるのか……だったな。なら一番目に強い技を出してやる」

そう言って、背中に吊っていたセラの葉っぱの剣を抜き、二刀を構える。するとまた魔力が集まり剣がとても鮮やかな光に包まれる。そう認識した瞬間に、

「シッ！」

短い気合と共にこちらに飛び込んできた。

そして、二刀流による斬撃を次々にたたみこむ、星屑のように煌き飛び散る白光は、空間を灼くかの如き様だった。連続十六回のその攻撃が終わった瞬間、俺の体はばらばらになっていた。

「じゃあな、これで俺はお前を殺す事ができると言う事になったわけだ」

飄々とした態度はなりをひそめ、打って変わって冷たい刃のような鋭さで和人は言う。

そして、和人は歩いていく。

「待て、和人！」

そう引き止めると、

「どうせ、学校で会うだろう。それと俺の事は和人と呼ばないでくれ」

そういつと顔だけをこちらに向けてくる。

「俺はキリトだ」

そう、感情の何もかもを削ぎ落としたかのような冷たい声を残し、和人は墓場から出て行った。

和人・・・キリトside

家まで戻った俺はセラに呼び止められた。

「あそこまでやる必要があったのですか？」

「ああ、ユーへの疑いをそらす為・・・というのもあったんだけどな」

「・・・・・・・・」

黒のコートをアイテムボックスにしまいながら俺は言う。

「アユムが俺にうらみを持って自分を鍛えようとするならなおよし、少なくとも無力さを感じるくらいにぼこぼこにしておいた」

と笑いながら言う。いや、完全に苦笑いなのが自分でも分かる。

「なぜ、あなたはそこまで損をしようとするのですか？」

なんでだろうか・・・考えた事もなかった。キリトの姿で転生したから？いや違う。死ぬまで、坂本彰人だったところからそうだった気がする。

「たぶん」

そう、たぶん。

「人が悲しそうにしてたら俺も悲しくなるからさ。ユーには負の感情に包まれて欲しくないんだ」

これが本音だ。まじごとなく、坂本彰人として、桐ヶ谷和人としての・・・

「俺はこの家をでる」

「そこまでする」とは……」

俺は首を振り、

「いや、ちゃんとあてはあるしな。それと、セラはアユムの従僕だけど始めて戦ったときの罰ゲーム扱いとして命令したい事がある」

「……」

「だれが相手でも、ユーヤアユム、ハルナを守ってやってくれ」

「……はい、このセラフィム。命を懸けてもその命令をまっとうしましょ」

「そうか……なら」

じゃあな　と、自分でも驚くほど小さな声でそういった。

これが最初の、16年生きてきて初めての親友との仲違いだった。

思ったよりも早い決着がつくのだが、それはまた別の話である。

「これはゾンビですか？もさかのあの人だ！」

俺は暗い夜道を歩いてきた。時間は夜の八時ぐらいだ。
俺は今夜の泊まり先になるだろう所に歩を進めていた。

「それよりもこの剣だな」

とアイテムボックスを開き独り言を呟く。そこには名前のない片手剣が表示されていた。耐久値はないにも等しい。

そう、これはセラが作った剣である。二刀流のソードスキルを一回使っただけなのにこれだけでも減っている・・・ということはこのエリュシデーターなどの特別な武器しか耐えることはできないという事を表している。

「これじゃあ、二刀流はつかえないなあ。使えたら大きな戦力になるのに・・・」

どうにかして二刀流を使えないものかと、(往生際が悪く)頭をひねっている、見えてきた。

一人暮らしで生徒会に入っている『あの人』の家。

数秒躊躇して、インターホンを鳴らす。ピンポンと言うチャイムの音が聞こえ、

「はい」

「桐ヶ谷和人です」

「え、桐ヶ谷君？どうしたの？」

「ちょっといろいろありまして・・・」

「じゃあ、あがってあがって」

お言葉に甘え、家にお邪魔させてもらう。

(掃除とかも行き届いてるな。俺だったら一週間持つかどうか)

「お邪魔します」

「はい、どうぞ」

さて、ここからどうするか・・・って、素直に言うしかないか・・・
言えない所ははぶいて、

苦手な先輩に、『ある人物』そのままだからこそ、苦手な先輩に、

そして、リビングに移動し向かい合う。

「で、どうしたの？」

「えっと、実はちょっと友達の家に住候してたんですけど、ちょっといられない事情が出来ちゃってですね」

「喧嘩したの？」

「うっ」

さすが、話が早い。

「はい、で、いい宿泊先知りませんか？」

「うん、知ってるわよ」

「それってどこにありますか？」

すると先輩は驚くような事を言った。

「うっ」

「は？」

「いや、だって他にこの時間から止まれる場所なんか知らないもん」

「いや、でも」

いや、しかしほかに泊まる場所がないのは事実……。ならここ
で厄介になるほうがいいか？断るのも失礼だろう。

「じゃあ、ここに泊まらせてもらいます」

「うん、あ……じゃあ条件をつけさせてもらっわね」

「条件？」

「名前で呼ぶ事。先輩はつけてもまあよし。

タメ口で話すこと

「は？ただどですね」

「先輩命令」

「……」

まあ、先輩命令は仕方ない。でもこんなに距離をちぢめることになるなんておもってなかったけれど。

「じゃあ、これからよろしくおね……よろしく。」

『明日菜』先輩」

明日菜先輩はにっこりと笑った。

第十二話〜キリトVS???

無論あの後、ボウリングも行かないまま数日が過ぎ去った。

そして、先輩……『明日菜』先輩とはひと悶着も二悶着もあったのだがまあそれは別の話。

午後七時今俺は病院の前にいる。そう、京子ちゃんが入院している所だ。

ずっと考えていたんだ……

なぜ、京子ちゃんがユーのことを犯人と言ったのか？なぜ、病院の近くにあのクジラのメガロが現れたのか？ただの偶然かもしれないが、京子ちゃんが怪しいのは事実なのである。

そして、俺は京子ちゃんの病室を訪ねたのだが……

「この病院にはそのような人は入院されておりませんよ」

「……本当ですか？」

「はい、過去のデータも確認しましたがそのような人は存在しませんでした」

「そうですか、ありがとうございます」

俺は病院からでて帰路に着く。

場所自体はあってはいるはずだ。ならなぜ……

そうして、帰路についていた俺だがふと何かが脳裏をよぎった。

京子はおそこにいた。それは間違いない。

ならなぜいなかったことになっているのか。あれは記憶から完全に消えている感じだった、忘れてはいるかのような。

記憶を消す。ということは記憶を操るといふことだ。

それに該当するのは……魔装少女だ。アユムも記憶を操作してい

たじゃないか、そして京子はユーが犯人と言った。
それはユーについての情報が知りたかったからじゃないのか？

ここまで考えたら、なぜユーの情報を知りたかったかもおのずと分かる。

たぶん目的はユーのあの不思議な力だろう。

あの力を手に入れたいがタメの行動。そう考えたら納得できる事は多い。

ならなぜ京子ちゃんは今消えた？

もしかしたら、

その時、俺に最悪の考えが浮かぶ。

もしかしたら準備が完了したからじゃないのか？

準備が完了したから、行動するには邪魔な肩書きを捨てたとしたら……？

なら今まさに京子ちゃんは計画を実行に移しているんじゃないか？

だとしたら……

そして、誰もいないところまで移動し完全装備になり、索的スキルを使い京子ちゃんを探す。

誰かの家の屋根を蹴りはねるよう移動する。

京子ちゃんはある墓場にいるようである。そこまであと少し……

見えた。

しかし、そこにいたのはボロボロになったアム達とほとんど傷を負わずにコスプレのようなふわふわした服を着ている京子ちゃん。そして、いままさに宙から落ちようとしているユーだった。

くそっ！間に合え！

俺は全速力で走り、宙でユーに手を伸ばす。

はたしてそれは……

ユーに届いて抱きかかえるようにし、体を丸めて勢いを殺しながら着地する。

「あなたは？」

京子ちゃんは……いや、こいつは敵なのだから……京子は単純に目の前にいる人物が分からないというかんじで言葉を投げかけてきた。

「桐ヶ谷和人だ」

「和人！」

アユムが俺に向かって言う。

「アユム、ユーをあずかってくれ」

「和人、俺は……」

「話は後にしよう。すぐに決着をつけるから」

そして、俺は京子に体を向ける。

「すぐに決着をつける？あなた、私のことをなめてるんですか？」

「なめてるわけじゃない。どうやら俺の仲間をさんざん痛めつけてくれたみたいだな」

「はい、ユーさんの力がほしかったので」

「そうか、……あんたは俺の仲間を殺そうとしたんだ。それ相應の覚悟はしているんだろうな」

俺は、俺にしてはめずらしく

怒っていた。

俺はキツと京子をにらみつけた。しかし、京子は最初に見たときと同じで小悪魔的な微笑を浮かべている。魔力の総量は見えているはずだ、俺以上の魔力を持っているのか……それとも

何か隠し玉でも持っているのだろうか？

「どうしたんです？かかってこないんですか？」

「そっちな」

とりあえず、相手の挑発を避けてなおも思考を続ける。

アユムやハルナはともかくセラまで倒れているということは相手はセラ以上の速さをもっているか、もしくは速さを武器に戦うものへの対処法を心得ているのかのどちらかだろう。

そんな相手に必殺の一撃であるソードスキルをぶち当てるのは至難の技だ。ソードスキルのブーストはクリスとの修行（なぜか、あいつはバカみたいに強いのだ）でも成功確立はまだ三十％程度・・・実践で使うにはまだまだ危うすぎる。

こうなったら、ピュアファイターの能力構成（ビルド）を脳の能力構成を無視するしかないか。

そして俺は息を吸い、その酸素が自分の体の中に満ちていく様をイメージしていく。

実践での焦燥感、過度な緊張感が収まっていく。それらが収まると京子の姿がはっきりと見える。息を吸う様子も体の微細な動きが見て取れる。

まあ、それらが見えるのは相手の行動が読めるといつかつこいいものではなく、脳の思考クロック数が多くなり処理能力が高まり時間が引き延ばされて見えるだけなのだが・・・

それにしても、相手は二刀流か・・・自分の力に見合う武器があるやつはいいな。

自分のもう一つの剣はどこにいったんだろうか？

まあいい。

相手はこちらの出を見ている。

見せてやる。俺の新戦術を！

俺は下の石畳が砕けるほどの強さで地面を蹴り、走るといふよりも飛ぶようにして相手に向かっていきながら、ソードスキルを発動させる。

《レイジスパイク》片手剣の基本技の1つで、突進と共に片手の剣で突きを放つ技だ。威力自体は高くないが、突進距離は《ソニックリープ》よりもこちらの方が長い。

元々の突進の速度に、高い敏捷度によってブーストをしなくても速いソードスキルの威力が合わさる。

しかし、その技自体は交差された剣によって火花を散らしていないさ

れる。
そして、京子は硬直時間を見逃さずにかんりの速さでの攻撃を放つ。

それは俺の肩を狙っている。その攻撃は、あたれば俺の肩を砕き自分の間は剣が握れなくなるほどのダメージを俺に与える事だろう。

しかし、

「ケフヨ、ゼカ」

短く唱えたその言葉によって引き起こされた現象、それは突風だった。

だが、それは京子に対しての攻撃などではなく、対象は

俺だ。

「なッー」

京子のこえからは明らかな驚きが見える。しかし、それは文字で《驚愕》と書くほどでもない、短く、そして、体の動きにも少しの支障をきたす事のないものだった。

しかしこれは元々距離を稼ぐものであり、相手に隙を作る技ではないので別にかまわない。

俺は術後の硬直時間を吹き飛ばされる間に済ませ、両足で着地する。

そして、瞬間的に攻撃に転じる。

ソードスキルの帯びていない只の一撃。

それを京子は簡単に弾く

前に、剣を手放す。

「ッー」

今度は、ちゃんとした驚愕だ。そして、弾き飛ばされた剣を無視し相手に向かって体術スキル《エンブレイザー》を心臓に向かって打つ。零距离で相手にイエローに輝いた腕で貫き手を繰り出すその技は京子の心臓に向かって一直線に向かい、

貫いた。

「あっ……」

京子の体から力が抜け、抜き手が京子の体から抜ける。

気持ち悪い異様な感覚と、人を、生き物を殺したということに気分が悪くなる。

俺は自分の手についた血を見つめる。

血……か……

その血から前世のことを思い出しそうになる。

しかし、その血を見ていたことが結果的にいい方向へと転んだ。その血が蒸発しだしたのだ。

「な……」

そして、倒れていた京子が生力に満ちていく。

「ふふふ、あはははははー」

高らかに、あるいは狂ったように嗤う京子に向かって俺は動揺を隠す事なんかできるわけがなかった。

今のはアユムの不死身なんかとは全くちがう。まるで生き返ったようじゃないか……

「あはははははー！　　気になりますか？私にまだ死んでいないのか」

「ああ、教えて欲しいな。なんで生き返ったのかと、魔力の総量も全部

元に戻っているのか」

「それはですね、生態の宝珠というもののおかげですよ」

「生態の宝珠？」

「はい、一度死んだものを生き返らせてくれる優れたもののアーティファクトです。まあヘルサイズさんとアユムさんのおかげであと六回程度でしょうけどね」

「残り人数みたいなものか・・・、いやなんでもない」

「ごんどはごっちも本気を出しますよ」

いつそつ赤色の目を強く瞬かせたと思うと、京子の周りに竜巻が出来る。上がる。

「その赤色の目と生態の宝珠は誰にもらったんだ？」

「あれ？私そんなこと言いましたっけ？」

「いや、その目が明らかかな偽者だったからな」

「よく分かりましたね、これはある人が吸血忍者の能力を使う為にくれたものですよ。なぜ分かったんですか？」

「いや、その目のことはたぶん一番見慣れてるからな」

「??？」

「分からなくてもいいよ。どうせ誰もわからないんだからな」

そういった後また強襲をかける。

そのあとのことを言うと、あんなにかっこよく色々のたまったのにも関わらず申し訳ない限りなのだが、一方的に京子のペースだった。

竜巻のせいで京子には近づけずに傷が増えるのみだった。

「はあ、はあ、はあ・・・くそっ」

思わず悪態をついてしまうほどに手も足もでない。

「このときほどアユムがうらやましく思ったことはないな。

そう苦笑したところでこちらに向けてはしってくる影が見えた。

さつきも話に出たアユムだもう変身はしているようで魔装少女の姿で京子に向かって突進していく。

「待てーアユムー！」

「じおおおおおおおおお
!!!!!!」

俺の制止も聞かずに京子に向かって突進していく。

竜巻でずたずたになってもかまいもせず京子に向かってチエー

ンソウをふるつ。

その攻撃は見事にあたるが一度だけだ。

アユムはその後すぐに竜巻によって切り刻まれる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
!!!!!!!!!!!!

声を上げる暇もなくいくつモノぱーツにわかしたあユムを目にシタとき、オレのなかのナニかが何度もケイケンしたあの音とともにぶちりとちぎれた。

・・・

「・・・・・・・・」

いつの間にか元の体に違和感を覚える前に、目の前にいた人物に気づく。

「かず・・・とー」

目の前にいた和人の姿をみて声を荒げる。

なぜなら、和人は自分の片腕を『持っていたのだ』。

そこからは血があとからあとから流れ出てくる。

「おいー大丈夫なの・・・」

そこまで言っただけはやっぱり気づいた（いつものことだが鈍いな、俺は）。

和人の目が吸血忍者とは比べようもないほどに赤く、赤く染まっていた事に。

そして、和人はその手を元々つながっていたところに引っ付けた。

それは明らかに引っ付ける程度のことしかしていなかったはずなのに、完全につながっているようだ。

よく見ればコートもいつもと違い、黒色が増し、白のラインが引かれている。

そして、和人は京子に向かって歩いていく。

「大丈夫だから、親友のオレを信じろよ」

あの時と同じニュアンスの言葉のはずなのにあの時よりも危機感は大きかった。

俺は、歩いてきた。

京子に向かって隙だらけの状態だ。

「どっしたんですか？もうあきらめたんですか！」

そうやって、刀のほうでオレの足をぶった切る。

しかし、この後その笑い顔は驚愕の顔に変わる事だろう。

予想通り、

「なんで、なんでもできたはずなのにまだ足があるんですか！」

猛攻は続くがそれでもオレの体には傷一つ残らない。

「無駄だよ。おれの超回復能力には勝てないよ」

「超……回復能力!？」

そう、真祖の吸血鬼の如く、さながらあのキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード、鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼の全盛期のように、

「オレは吸血鬼だったからね、まさか、この体でも残っているとは思わなかったなあ。この小説を読んだ方々はさぞ驚いている事だろう」

「小説？」

おっと、メタ発言はたいがい……

「二重人格見たいな感じだよこれは、このときはあの技は使えないけどな」

そう言ってるあいだにも元の人格（といっても本当はちがうんだけどなあ）の意識が薄れて、コートとズボン、剣が薄れてきている。まあ、こんなものはいらない。あってもなくても早々変わらない！

そして、相手に向かって詰め寄る。竜巻などもう関係なしに相手の体を具体的に言つと腹を殴りつける。すると、そこは縛散する。

「この、化物オオー！」

「知ってるよ」

相手が放つ劫火を無視し、また殴りつける。

残り四回。

「あああああああー！」

三

「くそおおおおお」

二

「うあああああ」

一

最後の一撃を転がっている京子のすぐ横にぶち落とすと、地面にヒビをいれて京子も気を失ったようだ。

それを見届けると、速く俺のかうだを返せトでもいうように視界がブラックアウトシタ。

誤解の戦い

「うっ……」

不快な感覚と共に意識が戻る。

少しずつ、少しずつ目を開けていく。しかし一体どうなったのだろうか？アユムがバラバラになった後意識がなくなって……。

考えるだけの余裕ができた事に安堵しながらも今の状況を確認する。服装はインナーまで黒のいつもの黒づくめだ。背中にこつこつした感触があることからちゃんと愛剣も背負っている事が分かる。

体には傷は残っていないが妙な倦怠感がある。

いや、

妙な倦怠感とはいえないだろう。なぜならこの倦怠感は一度死ぬまでに、俺が桐ヶ谷和人に転生するまでにさんざん付き合ってきたのだから。

体を少しずつ少しずつ持ち上げていく。体の休めという命令に逆らった代償か、鋭い痛みが俺の頭を貫く。

そして、木に寄りかかっているはずのアユムの元に進み声をかける。

「大丈夫かよ、役立たず」

「ああ、大丈夫だ。つたくとんだかませ犬だ」

無理やりに、気を強く持とうとしているのがばればれた。

アユムは、すぐに立ち上がり京子のもとへと歩いていった。止めを刺すつもりだろう。それを止めるつもりはない。

ハルナ達の様子を見ようとした瞬間、

チリツ……

うなじの辺りに違和感を感じた。

誰かに見られている？夜の王だろうか？いや、この殺気は俺とアユムにのみ注がれている。

アユムはまだ気づいていない。今にも魔装錬器を振り下ろそうとしている。

どうせ間に合わないのだ。傍観を決め込むつもりなら構わない。

瞬間、

アユムの手をがしりという擬音がつきそうなほど強く握った人物がいた。

中学生でツインテールで貧乳の女の子。今にもロリっという音が背景に描かれるのではないかというほど可愛い女の子が人間の力を超えているアユムの腕をあの手で支えている。

こんな事ができるのは『魔装少女』のみ。

そんな時、

「大先生！」

いつの間に現れたのかハルナが大声でそう呼んだ。

「ハルナ！あいつがどんな奴なのか知っているのか？」

「あたりまえだろうっ！あの人はな！メガロ二百匹を一人で片付けた事もある人なんだぞ！あんたがいくら強くても大先生にかなうわけがないんだっ！バーカ！」

残念ながら力の差は痛々しいほど分かる。何をとっても俺は大先生のステータスに届くものはないだろう。あるとしたらこのござかしい頭だけか……。

自分にしては弱気な事を考えているとその『大先生』はこっちを向いてにっこりと笑った。

「あなたもお、私の大事な生徒に危害を加えようとしたのですかあ？」

「ああ、確かに俺達は京子に危害を加えようとした。だけど、そもそもはそいつが俺たちの世界の人間の魂を刈り取っていたからだ」

「騙されないで下さい！アリエル先生！」

説得を試みようとしたものの京子の妨害のせいでいまいちな説得感になってしまった。

さすがの俺も今には怒りを覚える。図々しいにも程がある。

「大先生！アユムは気持ち悪いですけど二人は悪くないんです！」

「ツッコミは今はおいておくとして、こればかりは全員でかかるしかないか。」

「セラ！アユム！俺が陽動をしかけるから援護を頼む！」

「分かった！」

「委細承知」

返事が返ってくるると同時に、俺は大先生との距離を一瞬と言ってもいいほどの速さでつめる。

そして同時にソードスキルに設定された動作を瞬時にとる。

『バーチカル・スクエア』縦方向四連撃の大技でかなり使い勝手がいいその技を大先生に向かって打ち出す。一撃目、相手の体の正中線に向かって打ち出す。

完全に捉えたはずなのだが、その一撃は空を切った。
なぜなのかを頭の中で思考するまでもなかった。

大先生はただ単純にサイドステップで避けたただけだ。
ただ、そのスピードが速すぎただけなのだ。

俺の目でも捉え切れなかった

すくなくならず気落ちしてしまった俺に対して大先生は相も変わらずこつちが眠くなるぐらいののんびりとした声で俺に話しかけてきた。

「わあ、すごいですねえ。あなた、本当ににんげんですかあ？」

「このごろはそれに疑問すら覚えてきたよ」

さて、軽口を叩き虚勢をはってみたいがどうしたものか・・・
そう考えている間に（ほんの一、二秒だ）木陰からセラとアユムが出てきた。

セラとアユムはほとんど同時に攻撃を仕掛けた。

セラは俺からみて、左から、身を沈めて足を、アユムは全速力で走りながら上半身を横薙ぎにする動きを見せている。

今度も大先生は目にも止まらぬ速さで、避けるのかとも思ったが大先生はセラの攻撃をギリギリまでひきつけた後で半歩ほどの動きでよけ、セラの背中を思いきり蹴り上げる。

そして、そのエネルギーは面白いほどに吹っ飛ばされる推進力に変わり、セラはアユムにぶつかると同時に倒れた。

セラの動きの速さを見越してこそその防御・・・いや攻撃も兼ね備えているのだから攻防一体とでもいえるか。

よう、同じは・・・

「セラ―剣を貸してくれー」

セラは身を起こしている最中だったが俺に葉っぱの剣を投げ渡してくれた。

セラが使うようなクナイのような形をしたものではなく、もっと長く幅広だ。しかも両刃にしてくれている。

相手が二刀流ならこっちも二刀流だ。手数が多さで攻める

！

いささか、単純な手だとも思われたが残念ながらこれ以上の案は浮かばなかった。

ここには利用できる地形なんか見つからないだろうし、油断を解かれてしまったら俺たちは壊滅だ。

深呼吸をして脳に酸素を届け、いらぬ気体を口から吐き出す。

そして、俺はソードスキルを発動させる。

システムアシストと、敏捷力の高さによって速度が加速される。

そして、それと同時に脳のクロック数も上昇し、世界の速度がややおちる。

そして、大先生に向かってライトエフェクトがかかった剣を右から振るう。しかしソノ一撃は左手の剣で受け止められる。

しかし、俺の攻撃はまだ終わってはいない。

コンマ一秒遅れで左から剣が大先生に襲い掛かる。

二刀流突進技『ダブルサーキューラー』・・・。

その左から襲い掛かった剣も相手の剣で防がれてしまう。

しかし、これでつばぜり合いに持ち込んだ。足が滑らないように靴を地面にしっかりとかませる。

どつやら力のほうは相手と同じのようだ。

・・・いや、やや上から押さえ込んでいる形になっているこっちの

ほうが力は弱いか。

「なかなかやりますねえ。あなたが魔装少女だったら多大な戦力になるでしょうねえ」

「あんたこそ、こんなに、思いっきり、力を加えているのに、ちっとも押せないなんて、どうにかしてるぜ」

そう答えると、大先生はふふつと笑った。

そのすぐ後、

ビシッ……という鋭い音が左のセラが作ってくれた剣から聞こえてきた。

ふとその剣を見るといくつものひびがはしっていた。

やっぱり強度に問題があったか……！

このままだと剣を壊されてバランスを崩して攻撃をモロにくらってしまつとそう判断しバックステップで距離をとる。

「あらあ、もったいですねえ」

いつてる

そう心の中で毒つく。

「こつなつたら京子を直接狙うしかない。

「アユム！少しでも大先生の気をひいてくれ！」

「まかせろー！」

アユムが少しの間大先生の気を引いている間に京子のところまで移動する。

そして、一撃でしとめるためにソードスキルを発動しようとした瞬

短い悲鳴しか出てこない。

徐々に体の先の方から力が抜けてくる。

眩む視界のなか、ユ一の驚愕の顔だけがやけに印象に残った。

そして、俺は意識を失った。

ヒロローグ

ゆさゆさと誰かに揺すられている。

ためらいがちにしているのだろう。僅かばかり力がこもっていない。

しかし、その行動は俺の意識を覚醒させるには十分だったようで俺は水の中にいるかのような倦怠感を感じながら、これまた糊付けされたかのように全く開こうとしないまぶたを開けた。

そして、ピントの合わない視界に映ったのは純銀のような髪であった。

ピラっとどこから取り出したのか分からないメモ用紙を見せてくる。あいにくまだ何を書かれているのかはわからないが、その行為によって視界に映っているのはユーであることが分かった。

「お……」「ー、おっす」

やや気だるげに返事をする、ユーはまた新しいメモ用紙を見せてきた。

今度は目が慣れてきたのか、何が書かれているのかはおぼろげに読み取ることができた。

曰く

「(大丈夫?)」

の一言だった。

いなくなったことに怒ることもなく、まず俺の心配。

感情を表すことができないことを差し引いても、糾弾の言葉がでて

くるより早く心配の言葉を表すユーはやっぱり優しいなと思ってしまっ
まう。

そうそう、思い出した。俺はあのよく分からない霧みたいな闇に体
を貫かれて気絶させられたんだっただな。

今改めて思ったが、俺って短期間に意識を失いすぎじゃないか？
それぐらい俺が弱くて、他のやつが強いということなんだろう。
情けない。自己嫌悪で消えてしまっそうだ。言葉に出したらユー
に怒られるだろうが死んでしまっそうでもある。

前世でも自己嫌悪、劣等感と劣悪感、その他もろもろで死にそうに
なっただけか。

でも、いまは死ぬわけにはいかないんだ。前世と違うのは見た目と
力の大小だけではない。人間関係が周りに築かれているのだ。

前世とは比べ物にならないぐらい根深く。

みんなの心の中に浅く、深く絡んで、縛って、俺の存在が突き刺さっ
ている。

前は、絡むことすらもできなかった。

だから、俺はこの世界で過ごしたいんだ。紙の世界でも、ライトノ
ベルの世界だとしてもこの世界は立体的で現実的で分厚くて大きい。
決して『偽物』なんかじゃない。

少なくとも、俺以外は。

ああ、大丈夫だ。そう短くユーに答えて足に力を入れて立つ。

ややふらつくが、そんなのは気にするもんか。

俺はユーの手をやや強引に引っ張って、回復を待っているセラ、ハ
ルナ、そしてアユムの目の前に行く。

そしてユーを俺の前に押し出すような形で俺の方に向かせる。

そのまま俺はユーから二歩分ぐらい距離をとって、アユムたちを見据えた。いや、見据えるといってもそんな高圧的じゃないか……。

そのまま俺は体の上体のみを前に傾け、お辞儀の形をとる。そして、

「うめんなやう」

あやまった。

こうして皆にあやまってるが、実を言つとどうかお察しのおりかなり怖い。

軽々しく許してもらおうとしてるわけである。

今回は深いわけもない。なにか思慮や策を巡らせているわけでもない。

そんな俺に飛び込んでくるのはトラウマよりもっと黒々しくてグロテスクな前世での記憶。

罵詈雑言なんかはまだ良かった。効きもしない蹴りとかの暴力が一番辛かった。

それで、体育座りのまま人形を抱きしめながら痣のひとつも残らない俺を見てみんなは同じような言葉の刃を突き刺していく。

そんなものを向けられて『一向に擦り切れない自分の心が一番怖かった。』

だから、この世界で赤ん坊からもう一度育てられて、心が擦り切れないように捨てたものをもう一度拾ってつないでいくのは本当に楽しかったし嬉しくて。

本当にどうしようもなく。

だからよく泣いた。精神は赤ん坊よりも発達していた俺なのに、よく泣いていた。

今、謝ろうとする前。俺の心は『勝手に』謝ろうとする対象の表情を切り取っていた。

そんな俺だけれど。許してくれるのだろうか。

ここで誰も許してくれなくて三流のダークファンタジーのようになるのは嫌だ。

戻らないつもりだったけど。やっぱりヒトなんだから。耐えきれないじゃないか……！

「当たり前だろ」

そんな風に最初に口火を切ったのはハルナ……ではなく意外にもアユムだった。

「俺のことを殺したのはお前じゃなかったけど、でも結構ひどいことされた。だから謝るのは当然

だ。当然だけど、それでプライマイゼロだ！種ももう全部聞いてんだよー！」

そして、セラのほうを見ると何も言わずにただ頷いた。それは、アユムに全部教えたのは自分だということ、自分も許すということを示しているようだった。

「しゃ、しゃーなしだな！しゃーなしだ！だけどその代わり私の弁当食べよなー！」

ほとんど何も考えていなさそうなバカに見える天才さんはそんな風に明るく答えた。

「（私も許す）」

いつもどおりに見えるユー。でも今日は何かが違った。まだ、今はそれを読み取ることができないけれど。

わずかに笑う（ユーはいつもどおりの無表情だが）みんなの前で心の奥の奥で嬉しさと安堵を噛み締めながら、俺は精一杯の感謝の言葉を叫んだ。

で、なんでこうなった？

今、目の前にはメイド服を着たアユム達がいた。それだけならまだ腹を抱えて笑うことができるのだ

が、いかんせん自分がメイド服を着ているので笑えない。

まあ、自分の姿はまだ中性的な方なのでアユムより見苦しくはなっていないと思う。多分……。

やっぱりこういうふうにワイワイしてるのが自分には合っているのかな。

無理やり持たされたギターを握り締めながらそう思った。

やっぱり自分はおさまりたい。

心の底からそう思う。ずっと思ってる。